

第42回「全日本中学生水の作文コンクール」
入賞作文集

水について考える

主催 水循環政策本部・国土交通省・都道府県
後援 文部科学省・厚生労働省・農林水産省・経済産業省・環境省・
全日本中学校長会・水の週間実行委員会・独立行政法人水資源機構



「健全な水循環」

ロゴマーク

第42回 全日本中学生水の作文コンクール について

水は人間や動植物といったあらゆる生命の源であり、社会経済活動に欠かすことのできない最も基礎的な資源であり、限りある資源でもあります。

「水の日」及び「水の週間」は、水の大切さや水資源開発の重要性に対する国民の関心を高め、理解を深めるため、昭和52年の閣議了解により政府が定めたものです。年間を通じて水の使用量が多く、水についての関心が高まる時期である8月の初日を「水の日」（8月1日）とし、この日を初日とする一週間（8月1日～7日）を「水の週間」として、水に関する様々な啓発行事を毎年実施しております。

この「全日本中学生水の作文コンクール」は、昭和54年より「水の日」・「水の週間」行事の一環として、次代を担う中学生の皆さんに、日常生活での体験あるいはご家族や先生方から学び聞いた話などをもとに、「水について考える」というテーマで実施しているものです。

平成26年3月に水循環基本法が成立し、8月1日は法律で定められた「水の日」となりました。このことから、「全日本中学生水の作文コンクール」を政府全体の取組とするため、最優秀賞に内閣総理大臣賞を、優秀賞に関係省大臣賞を創設したところです。

今回は、全国の中学生から9,444編（学校数319校）の応募があり、自らの体験を通じ日常生活における水の貴重さを表現したもの、美しく豊かな水を未来へ受け継いでいくために水を大切にしていこうという気持ちが表現されたもの、過去に各地で発生している地震や豪雨災害等の経験を通じて水について考察したもの等がありました。

このたび、入賞作文42編を作文集にまとめましたので、多くの方にお読みいただき、学校やご家庭において、「水」について考えるきっかけとしてご活用いただければ幸いです。

最後に、作文コンクールの実施にあたり、応募された中学生の皆さんや担当の諸先生方、またご多忙のところ審査をいただきました審査委員の先生方に厚くお礼申し上げますとともに、ご協力いただきました文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、環境省、都道府県、全日本中学校長会、水の週間実行委員会及び独立行政法人水資源機構等関係の方々には深く感謝申し上げます。

令和2年10月

国土交通省 水管理・国土保全局 水資源部

「水の日」・「水の週間」について

「水の日」及び「水の週間」については、昭和52年5月の閣議了解を基にその行事等を実施して参りました。諸行事の実施により我が国の水問題の解決を図り、もって国民経済の成長と国民生活の向上に寄与することを目的に、年間を通じて水の使用量が多く、水について関心が高まっている8月の初日である8月1日を「水の日」、この日を初日とする一週間を「水の週間」としております。

「水の日」及び「水の週間」について

閣議了解
昭和52年5月31日

水資源の有限性、水の貴重さ及び水資源開発の重要性について国民の関心を高め、理解を深めるため、「水の日」を設ける。

「水の日」は毎年8月1日とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」として、この週間において、ポスターの掲示、講演会の開催等の行事を全国的に実施するものとする。

上記の行事は、地方公共団体その他関係団体の緊密な協力を得て行うものとする。

平成26年3月に水循環基本法が成立しました。本法律では、水が健全に循環し、そのもたらす恵沢を将来にわたり享受できるよう、水循環に関わる施策を包括的に進めていくことが不可欠であるとされました。また、同法第10条において、「水の日」が8月1日と規定され、国及び地方公共団体は水の日趣旨にふさわしい事業を実施するように努めなければならないとされています。

水循環基本法（平成二十六年法律第十六号）

（水の日）

第十条 国民の間に広く健全な水循環の重要性についての理解と関心を深めるようにするため、水の日を設ける。

2 水の日は、八月一日とする。

3 国及び地方公共団体は、水の日趣旨にふさわしい事業を実施するように努めなければならない。

全日本中学生水の作文コンクールは、広く国民が水の重要性についての理解と関心を深めるための普及行事として、「水の日」・「水の週間」行事に位置付け実施しているものです。

最優秀賞 (一編)

《内閣総理大臣賞》 私が使っている水

優秀賞 (八編)

《厚生労働大臣賞》 水と共に生きる

《農林水産大臣賞》 大地と街を潤す豊川用水

《経済産業大臣賞》 水の旅

《国土交通大臣賞》 水と関わり合う日々

《環境大臣賞》 未来に繋ぐ優しい水音

《全日本中学校長会会長賞》 水の向こうにあるもの

《水の週間実行委員会会長賞》 水のありがたさを知って

《独立行政法人水資源機構理事長賞》 つなぐ…水

入選 (三十三編)

岩手県 一戸町立奥山中学校 三年 中島 歩々菜

岩手県 盛岡中央高等学校附属中学校 三年 細田 萌々菜

岩手県 盛岡中央高等学校附属中学校 三年 村松 一朗

宮城県 仙台市立郡山中学校 三年 大柿 楽々

宮城県 宮城県仙台二華中学校 三年 西原 結花

秋田県 大館市立東中学校 三年 山上 りわ

福島県 会津若松市立一貫中学校 三年 井田 七海

群馬県 群馬大学共同教育学部附属中学校 三年 山口 郁子

埼玉県 浦和明の星女子中学校 二年 北神 咲季

千葉県 千葉大学教育学部附属中学校 一年 草場 美海

東京都 東京大学教育学部附属中等教育学校 三年 棚尾 さわ

東京都 慶應義塾普通部 二年 丸岡 龍生

新潟県 新潟市立中野小屋中学校 二年 高橋 穂花

富山県 高岡市立戸出中学校 二年 稲場 結奈

岐阜県 高山市立荘川中学校 一年 田口 亜美

静岡県 静岡市立長田南中学校 一年 近藤 沙彩

資料

第四十二回「全日本中学生水の作文コンクール」募集ポスター

第四十二回「全日本中学生水の作文コンクール」概要

第四十二回「全日本中学生水の作文コンクール」地方審査等優秀者名簿

第四十二回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況

第四十二回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況の推移

第四十二回「全日本中学生水の作文コンクール」表彰式

目次

京都府 綾部市立上林中学校 一年 柏原 葵 1

栃木県 佐野日本大学中等教育学校 二年 林 咲結理 2

愛知県 豊川市立南都中学校 三年 河邊 心那 3

熊本県 熊本市立出水中学校 一年 清水 遥 4

群馬県 渋川市立渋川中学校 二年 大谷 優斗 5

宮崎県 宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 三年 大城 冴和 6

愛媛県 愛光中学校 一年 井上 愛理 7

栃木県 佐野日本大学中等教育学校 二年 廣瀬 乃々佳 8

福岡県 福岡教育大学附属福岡中学校 二年 宇野 誠洋 9

愛知県 扶桑町立扶桑中学校 三年 真野 聡真 27

三重県 高田中学校 二年 作田 滯 28

滋賀県 大津市立唐崎中学校 三年 野平 ゆり 29

大阪府 大阪教育大学附属平野中学校 一年 引地 奏葉 30

兵庫県 兵庫教育大学附属中学校 三年 永田 愛織 31

奈良県 大和郡山市立郡山西中学校 三年 藤森 美花 32

奈良県 五條市立五條東中学校 二年 森田 舞依華 33

和歌山県 和歌山県立田辺中学校 二年 若勇 昌聖 34

鳴門教育大学附属中学校 三年 松永 理沙 35

高松市立牟礼中学校 二年 菜切 麻央 36

松山市立鴨川中学校 一年 木下 大悟 37

唐津市立海青中学校 三年 島田 梨奈 38

長崎市立淵中学校 二年 摺木 美花 39

熊本市立出水中学校 二年 森野 涼子 40

大分大学教育学部附属中学校 三年 山形 希来 41

内閣総理大臣賞（最優秀賞）

私が使っている水

京都府 綾部市立上林中学校 一年 柏原 葵

私は六年前、大都会の大阪から、上林というとても自然豊かな場所に引っこしてきました。上林に引っこして来るまでは、何もしなくても、じゃ口をひねれば水がでてきました。お風呂も、ボタン一つおせば、きれいな温かいお湯がたまっていました。

しかし、上林のくらしは全然ちがいました。特に私が住んでいる集落は、水道がきていませんでした。三年前まで山水をろ過して使用していました。

山水を使っていたころは、水量も少なく、お風呂に水をためるのも、すごく時間がかかりました。私の母に聞いてみると、山水で大変だったことは、「水圧が弱いこと」そして、雨がたくさん降ったときに「水がにごること」もう一つは、雨の後、パイプが詰まって、「水が出なくなる」とです。

私たちが使用している山水は、山奥の方から、長い長いパイプを下って、家の近くの貯水タンクでろ過されて、私たちの家に来ていました。そのため、水量も少なく、水圧も弱くなります。

それに、台風のように、たくさん雨が降ると、いろいろな葉っぱやどろなども混ざって、勢いよく流れてくるので、ろ過しきれず、少しにごった水が、家に届くときもあります。でも、母がいちばん大変だと言っていたのは、台風で、水が出なくなったりするときです。時々、台風るとき、水が流れるパイプが葉やどろでつまってしまったり、はずれてしまったりする場合があります。その時は、雨の中、地域の人と水源まで見に行つて、パイプをそうじしたり、はずれたパイプを直したりしています。しかし、水源に行くのは、その時だけではありません。一年に数回、交代で、見に行かないといけません。もし、パイプがはずれかけていたり、まわりがどろでいっぱいだったら、再度つまり、水が出なくなってしまうからです。私は一度、母といっしょに水源に行つたことがあ

ります。私はついて行って、おどろきました。水源のある場所がすごく山奥で、うす暗い場所だったからです。水の量は、川のようにたくさん水が流れているというわけがなく、ちよろちよるとわき水程度でした。パイプも、とても細いのが通っているだけだったので、自分達が使っている水の大切さ、ありがたみを感じる事ができました。

しかし、私は一つ、疑問に思いました。なぜなら、私の家は、現在、井戸水を使うようになり、山水は使わなくなっていたにも関わらず、母や父は山水の貯水タンクのそうじに参加しているからです。不思議に思つたので、母に尋ねると、「もし、井戸が枯れたり、電気がなくなると、井戸水を上上げるポンプが使えなくなり、また、山水を使うことになるから。」と答えてくれました。母が水のことを大切にしている思いが伝わり、私も、これから、もっとそうじに参加していきたいと思いました。

今は、井戸水になり、水がにごったり、水圧が弱くなったりして、困ることも無くなりました。ですが、井戸水も、いずれ枯れてしまいます。私は、これからも毎日のように使っていく自然の水を、大切に使うことと思います。

水は、私たちのことを苦しめることもたくさんあります。でも水は、私たちには、無くてはならない存在です。その水を守っていくのは、私たち、人間だと思えます。自分たちにできることは、ポイ捨てをしないことや、ゴミ拾いをする事など、本当に小さなことかもしれませんが、でも、今、一人でも何かしないと、いつか私たちに必ずかえってきます。そうならないためにも、私たちにできることは何なのかを考えることが大切だと私は思います。

厚生労働大臣賞（優秀賞）

水と共に生きる

栃木県

佐野日本大学中等教育学校

二年

林 咲結理

水は、私たちに利益を与える時と、害をもたらすことがあります。

私は先月、旅行で黒部ダムを訪れました。黒部ダムは、日本最高堤高、一八六メートルもある、大きなダムです。放水されるダムはともきれいでしたが、その影には、先人たちの努力の結晶がありました。黒部ダムに行くまでのトンネルで、青い光に包まれた何メートルかがありました。そこは、大破砕帯。岩盤の中で岩が細く割れ、地下水を溜めこんだ地層から毎秒六六〇リットル、平均温度四度の水が流れ出て、約八十メートル進むのに七ヶ月もかかった最大の難所だそうです。この大破砕帯を作るのを含め、黒部ダム建設では二五八人も亡くなったそうです。この大破砕帯を通る時、いつもとちがう気持ちになりました。水を使って発電をするという目的で、人々のために作られるのに、多くの人が亡くなっている。私は、とても考えさせられました。

このようなことや、台風、津波など、自然災害で大きな害をもたらす水。水は、時には人々を苦しめる時もあります。しかし、人々を救う時もなくさんあります。干害により、水がなくなってしまった時に配給される水。ごはんを炊く時に使う水。お風呂の水。水は害をもたらすことでもあります。やはり水は多くの人から必要とされる大事な物なのです。そんな水が健全な循環ができるようにするために、私たちができる事は何か、考えてみました。一番簡単にできることは節水だと思います。洗濯の回数を減らしてまとめて洗うこと。また、汚れのものを流さないことも大切です。排水口に水切りネットをつけて、食べ物のくずを流さないこと。そして、何よりも大切なのは川や海にゴミを捨てないこと。身近な所から、少しずつできることをやるだけでも、ずいぶん結果は変わってくると思います。このようなことをして、人間と水が「共に生きる」ことができる社会を作りたいです。また、私が考える「共に生きる」というのは、節水以外にもう一つあります。それは、「水について知る」と

いうことです。まず、海の水は太陽の熱で温められて水蒸気になり、やがて雲になります。そして、その雲は山にぶつかったりして、雨や雪になって降ります。この水が、地下にしみこんで地下水になったり、ダムを通して川、海、湖などに流れついたりします。また、生活用水としてくみ上げられる水もあります。くみ上げられた水は、取水地でたくわえられます。次に、着水井を通してくみ上げられた水の量、水質などが把握されます。そして、沈殿池を通してよごれを沈殿させ、ろ過池でさらに細かいよごれもとりのぞかれます。そして、塩素混和池で消毒され、きれいになった水は配水池から蛇口へと運ばれます。このような水の循環を知ることでも大事ではないでしょうか。なぜなら、水について知ってれば、水に関するお仕事をやってくれている多くの人たちに、感謝の気持ちを持てるからです。感謝の気持ちを持っていれば、節水をするのを常にも心がけることができると思います。その結果、浄水場での負担を少しでも減らせることになると思います。私の住んでいる栃木県は、海なし県なので、海を掃除するボランティア活動に参加することはほとんどできませんが、水について知ったり、節水することはできます。身近な所から水を知ったり、節水をしたりすることで水と「共に生きる」ことができるのではないのでしょうか。

私たちによって支えられている水、水によって支えられている私たちがかけがえのない水と「共に生きる」には、まず私たちの努力から始まると思います。

農林水産大臣賞（優秀賞）

大地と街を潤す豊川用水

愛知県 豊川市立南部中学校 三年 河邊 心那

新型コロナウイルスの状況も落ち着き、私たちの学校でも授業や学級生活が再開しました。六月三日からは給食も始まり、地元の食材を生かした献立を楽しんでいます。私たちの住む豊川市やその周辺では、特に、シソやウズラの卵が有名で、東三河地方が全国シェアの半分以上を占めているそうです。最近ではバラやスプレーマムなど、多岐にわたって全国トップレベルの生産をあげています。

そこで私は、昨年の夏休みに豊川用水について調べたり、頭首工を見に行ったりしたことを思い出しました。八十キロメートルに満たない豊川流域では、毎年のように洪水や干ばつに襲われ、五十万人以上の農民が苦しんでいたそうです。松原用水という細い用水路が一五六七年に造られたことから、どんなに長い間、人々が水に悩まされてきたかがわかります。明治時代になって、牟呂用水や神野新田という三河湾沿いの干拓地ができますが、水の安定供給によって人々の生活も安定したのは、豊川用水の完成があつてのことです。

豊川用水の完成によって、豊川が流れていない、愛知県の先端田原市までが、豊かな農地になりました。昔の田原市では、地下水やため池を使用した農業に、限界がありました。水不足にも強いサツマイモや小麦しか育たなかったそうです。今では、メロンやキク、養豚などで日本の農業をリードし、市町村別農業産出額は四年連続で全国一位に輝いています。一年間で使用される二億六千万立方メートルのうち、七十パーセントは農業用水に、二十四パーセントが水道用水に使われているとわかりました。私が特に驚いたことは、新城市大野の頭首工から渥美半島先端の初立池まで八十二キロ。豊川本流よりも用水の方が長いということです。さらに、電力を使用せず、自然の力だけで流れていると聞いて、びっくりしました。渥美半島は起伏があるのに、どんな工夫があるのか不思議に思いました。

もう一つ強く感じたことは、ダムのおかげです。決して長くはない豊川には二つのダムがあります。古くからある宇連ダムは、一九八十年代に一度干上がった、ダム底に沈んだ村が現れたと聞いたことがあります。豊川流域や豊川用水が水不足で困らないように、二〇〇一年には大島ダムが完成しました。それでもまさかの事態に備え、天竜川の佐久間ダムから通水もできる仕組みがあるそうです。私たちが生きていくうえで、水はなくてはならないものです。水に困っていた東三河の農業が大きく変わり、私たちの町に水が安定してやってくるのは、上流に住む人々のダム建設への理解と協力があつてこそです。故郷や住んでいた集落がダム底に沈んでしまった人たちがいることを、決して忘れてはいけません。水の供給や農作物生産がこれからも持続可能であるために、私も植林活動や河川の清掃に積極的に参加したいです。

豊かな田園風景やスプリングラーが勢いよく回る野菜畑。日本屈指の農業王国になった東三河。私たちの大地を潤すのは、豊川用水を流れる豊富な水のおかげだと、改めて感じました。豊川市という名の通り、自然に流れる川はもちろん、そこに生きる人々の苦勞や努力や知恵に支えられてできた用水やダムがあつて、水が流れ続けていることがわかりました。

豊川用水通水五十周年を迎えた今、あたりまえに手元に届く水のありがたさをかみしめ、この土地に生まれてきたことに感謝したいです。半年後には進学先を決定し、卒業の準備に向かいます。地元の食材を生かした給食をいただけるのも、わずかな期間となります。新しい土地、新しい世界に旅立つ期待と不安はありますが、きっと故郷の大地が支えてくれると思います。しっかりとこの土地に根を張って生きます。水が大地に染みわたっていくように。

経済産業大臣賞（優秀賞）

水の旅

熊本県 熊本市立出水中学校 一年 清水 遥

私は川の上流で生まれた水です。

そこは流れが速く、ゴツゴツした大きな岩が沢山ありました。流れが速く、水温が低いのでヤマメなどが住んでいます。水の中で暮らすトンボなどの幼虫もいるようです。見上げると川にはり出した枝の上に鳥たちがとまっています。魚をねらっているのかな。水の周りには多くの生き物たちがいるのです。

中流にやってきました。中流は上流に比べて流れがゆるやかで、周りに家も増えてきました。昔は、川原で遊ぶ子供達が多かったんだって。今はあんまり子供達が来なくなってます。少しさみしいな。流れがゆるやかな中流の岩にはコケが生えています。このコケをアユが食べます。また、そのアユを釣ろうとチャレンジャーしている人もいます。

私は、細い別れ道に入ってしまった。取水口です。そこから用水路に流れて行きカラカラに渴いた田んぼの土の上を走り出しました。土は、みるみるうちに水びたしになりました。

「ゴゴゴゴ……」
という音がします。田植えです。大きな機械で沢山の苗を植えています。毎日かするとおたまじやくしやアメンボなどの生き物がやってきました。秋の収穫まで見ていたいなと思ったとき、私は地面に吸い込まれるように土の中に落ちていきました。

そこは、真つ暗。そこには水の仲間達がたくさんいました。他の水たちは同じように田んぼ、川からきたり雨となってきたようです。真つ暗な中で私は眠くなってきました。

目を覚ますと、体がだんだんに押し上げられていくところでした。ブワツとみんなと一緒にあふれ出します。ここは、熊本市の動植物園の近くにある自噴井です。

なんだか、体に薬の匂いがする。水を殺菌しているのです。消毒が終わるとまた、水のたまり場にやってきました。今度は、配水池。水道に通す水を貯める場所です。

細い管のながい道を通り、広げたところに出ました。どんどん仲間が増えてたまっていきました。お風呂です。だれか、お風呂に入ってきました。お湯になった私達につかり、体を温めているようです。しばらくするとお風呂の電気が消えてしまいました。浴槽の下の方からゴゴゴゴ……という音がします。吸い込まれて落ちていってしまいました。

また、真つ暗な所に出ました。体が自由に動かさずベトベトしています。そこは、下水でした。それから下水の水が溜まっているところにやってきました。私の体はいよいよドロドロです。でも、流れにのったり溜められたりしているうちに、そのドロドロが少しずつはがれ落ちていきました。それを何回も繰り返すうちに、体が透き通って見えなくなりました。そして最後に消毒をされ、川へと流されました。

体がしよっぱくなくなってきました。ここは海ですね。しばらく波に揺られていました。天気が良いといい気持ち。すると、
「あつ。」

急に体がふわつと浮かび上がりました。蒸発しているのです。空の上までやってきました。それから仲間が集まってきて、小さな雲になりました。まわりには他にも小さな雲たちが沢山あります。その小さな雲と合体し、大きな雲になるとひとりずつ雨になって落ちていきました。

降ったところは知らない町でした。私を大切にしてくれる人たちが多い町だといいな。

国土交通大臣賞（優秀賞）

水と関わり合う日々

「よろしくお願いします。」僕はそうプールに向かって、一礼をしてから練習に臨む。それは、ほぼ毎日のことである。

プールを目の前にして僕は、「このプールに水を一杯にするには、どれだけの水が必要なのだろう。」そう考えていたら、つい最近、父と母が、「八ッ場ダムが三月三十一日に完成するらしいね。」と話していたことを思い出した。

いつの間にか、練習に集中して、ヘトヘトになって迎えに来てくれた父の車へ乗り込んだら、八ッ場ダムの景色を思い出していた。

「そうだ。僕は、八ッ場ダムに沈む前の景色と、沈んだ後の景色を見ていたんだ。」そう父と話しながら、家の中へ入ると、カレーのいい匂いと母の「おかえり。」の聲が迎えてくれた。父は、「ダムカレーかな。」と笑いながら言う。母は、「ダムカレーにしようか。」と笑いながらテーブルにカレーを並べる。そして、車の中での話を、カレーを食べながら話した。

僕がまだスイミングの選手コースに入る前は、夏休みや連休にはいろいろな所へ連れていってもらった。その中のひとつが、草津温泉だ。草津へ行く時は、吾妻溪谷を通って行っていた。母は、特にこの溪谷が好きだった。夏は、眼下に見えるキラキラとした川や、緑の濃い木々の間から見える日差しが眩しかった。秋は、紅葉がとてもきれいで、母は、「きれいだね。」「あそこもきれいだよ。」とみんなに教えてくれた。僕が、この溪谷について記憶があるのは、母のおかけかもしれない。いつの頃だったか、父や母が、この溪谷を通っている時、「この景色は、次に来た時は見れないかもしれないね。」と話していたことを覚えている。

父と母は少しなつかしように話をしながらこう続けた。八ッ場ダムは、この間の台風十九号の時、被害を少なくしてくれて、台風から守ってくれたということ。それに八ッ場ダムに限ったことではないけれど、ダム

群馬県 渋川市立渋川中学校 二年 大谷 優斗

があるおかげで、水害が少なくなるし、水不足にならない様になってくれるということ。それと、発電もしてくれるということ。けれども、ダムができた場所には、住んでいた人がいて、町があつて、生活があつたということ。そういつたたくさんの人の協力があつてダムはつくられたということ。改めて聞いて、再確認したことで僕は、ダムができる前の吾妻溪谷を、家族と一緒に見た景色を、決して忘れないと思つた。

今日も僕は水の中に居る。きっと同じ中学校の友達の中でも水の恩恵を受けているということに気づかせてもらった。

「ありがとうございます。」僕はそうプールに向かって一礼をしてから練習を終える。それは、僕が学童のコースから選手コースへ入った時、今は天国へ行ってしまったコーチが僕に「いいか。プールで泳げるということを当たり前にはいけないんだぞ。」と教えてくれたことを胸に、今まで以上に感謝の気持ちを込めて、大きな声で「ありがとうございます。」と言おう。

環境大臣賞（優秀賞）

未来に繋ぐ優しい水音

宮崎県 宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 三年 大城 冨和

川の流れのせせらぎ、波の音、雨音等、これらは全て水が奏でる音だ。人の生活の中にはいつも水音、つまり水が寄り添っている。

私が以前住んでいた長野県松本市には、「まつもと城下町湧水群」と呼ばれる井戸や湧水が沢山あった。したがって、海はないが水はいつも身近な所に存在した。これらは江戸時代には、人々の日常生活や防火用水として利用されていたそうだ。市内には水音が常に響いており、私はその音を聴きながら、城下町を家族でのんびり散歩することが好きだった。「水巡りマップ」を片手に古い町並みを探検し、水場で湧水を飲むと、まるでタイムスリップしたような気分になったものだ。また、江戸時代に町の境界線としての役割も果たしていた水路は、時代を経た今も、潤いを与えてくれている。このように水を上手く利用し、町も文化も発展し、今がある。そのことを古い町並みと心地よい水音が私に教えてくれた。

その一方で忘れてはならないことは、水が与えるものは恩恵だけではないということだ。近年、日本では「観測史上最大級」、「未曾有」という言葉のついた水害が多く発生している。大規模な被害をもたらす台風に着眼してみると、温暖化の影響で関東や中部等を通過する東寄りの軌道が増え、その勢力も年々強くなってきているようだ。昨年の台風十九号は、複数の都市に、甚大な被害をもたらした。そこには長野県も含まれており、私の祖父母の家も浸水の被害を受けてしまった。「七十年近くここに住んでいてこんなことは初めて」、「長野県にこんな大きな台風が上陸するなんて。」と祖父母は口々に語った。テレビの映像や送られてくる写真では、私のよく知っている場所が水没し、幼い頃に祖父母と遊んでいた公園も災害ゴミで見る影も無くなっていった。そして、避難場所に指定されていた場所さえも浸水してしまい、避難していた人々が再避難する状況も起こったそうだ。私は大きなショックを受けた。

小学校四年生の時に、長野県から宮崎県に引越して来た私は、両県の水害に対する対策の違いがあると感じた。海がなく、台風もなかなか上陸することのない長野県では、学校の避難訓練で屋上避難の練習をしたことがなかった。また、雪への備えはしたことがあっても、台風への備えはしたことがなかった。昨年の台風十九号が未曾有の災害であったのは確かだ。しかし、長野県で被害がより大きくなってしまった原因の一つに、地域による水害への対策や意識の違いもあったように思う。私が宮崎県で初めて台風を経験した時、風雨のあまりの威力に驚いた。宮崎県での生活は、私の水害に対する意識を大きく変えてくれた。厳しい冬や大雪に対して適切に対応できる長野の人々。津波に備え、台風に対しても適切に対応できる宮崎の人々。両県に住んでみて、同じ日本でも、その土地その土地の自然との付き合い方が、知恵として根付いていることに気付かされた。

水資源が豊かな水の国日本。しかしそれは同時に、水害と常に隣り合わせであるということだ。これまで人々は、治水事業を行いながら水と共に生きてきた。地球温暖化による気候変動により、私達はおそらくこれから先何度も未曾有の水害を経験するのだろう。水なしに人の生活は成り立たない。私達は水に翻弄されつつも、水に生かされている。だからこそ私達も、水害に立ち向かいそして学び、昔の人々が繋いでくれたバトンを新しい形で次に繋げていくことが大切だと強く思う。心地よい水音が響く、美しいこの国を後世に継承していく為に。

全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

水の向こうにあるもの

愛媛県 愛光中学校 一年 井上 愛理

目に見えない敵をかわすため、私はただひたすらに手を洗う。こうすることで、少しだけ心が平穏になる気がした。せっけんを泡立てる手の向こうには流しっぱなしの水。

分かっている、いや分かっているつもりだった、水は大切だということ。自分にとって大切なのか、いや世界中の人々にとって大切なのか、この水は。

ハツとして、私は勢いよく流れている水を止めた。この水は、みんなのものだ。

世界中に猛威をふるっている新型コロナウイルスには、手洗いが有効だということは何度も何度も聞いた。衛生的な水でいつでも手を洗うことができない、これは当たり前ではないと知ったのは、最近のことだった。私の住む地域では平成六年に大洪水が起き、時間断水を行ったため、夏場に四〜五時間しか水が出なかったそうだ。一日のうち、蛇口から水が出る夕方の数時間以外は、お風呂やバケツなどにためた水を無駄遣いしないように少しずつ使っていたと聞いた。日本は地震や水害など、多くの災害が起こってきた。長期間の断水が続く状況は、想像を絶する苦労があっただろう。未知のウイルスにおびやかされている今、もしこのような状況になってしまったら、生活に支障が出ることはもちろん、思う存分手を洗うこともはばかられ、きつと精神的にもつらい日々となるはずだ。蛇口から水が出る、それは当たり前前のことではないのだ。

地球規模で考えると、災害という理由だけではなく、日常的に水が使えない国や地域があることを知り、私はがく然とした。安全な水が手に入らない人は、世界で六億六千三百万人もいる。身近なところに水がなく、子どもたちが水をくむという重労働を強いられ、一日の大半の時間と労力をそのために消費し、教育を受ける機会もないということを知った。

また、水が使えないために手を洗う習慣自体がない国もたくさんあるそうだ。世界中で手洗いの重要性が叫ばれている今、もしこのような国や地域で感染症が流行してしまつたらどうなってしまうのだろう。水が使えない人々の生活や気持ちを考えると、胸が痛む。感染症を防ぐ手洗いという手だてもないままに、命の危険にさらされてしまうのか。

水の向こうにあるものは、命。

この水で感染症を防げる。この水で命が救われる。この水で世界は幸せになる。この水はみんなの水だ。ほとんど意識することなく水を無駄遣いしていたことを、私は申し訳なく思った。

自然は時に人間に試練を与える。雨が少なければ干ばつを、多ければ水害を引き起こし、容赦なく刃を振りかざす。自然をコントロールすることはできないながらも、自然と折り合い、共存していこうとする謙虚な姿勢が私たちに必要だ。

二十五年の国連サミットで採択された持続可能な開発目標（SDGs）は、二十三十年までに、持続可能でより良い世界を目指す十七の国際目標となっている。そのうち目標六は「安全な水とトイレを世界中に」と掲げられており、すべての人々の水と衛生への利用可能性と持続可能な管理を確保することがゴールだ。水は限りある資源であると同時に、無限の可能性も秘めているのだ。多くの命を守るために、世界は大きく動き始めた。

今私にできることは、行動を起こすこと。そして、問題に向き合い、考え続けること。水を流しっぱなしにしないことや、募金をすることは、今すぐできることだ。また、水の問題について自分の事として考えてみることでできる。

世界中の人々が安心して衛生的な水を使うことができますように。そして、自然と共存しながらよりよい未来を迎えることができますように。

水の週間実行委員会会長賞（優秀賞）

水のありがたさを知って

栃木県

佐野日本大学中等教育学校 二年

廣瀬 乃々佳

日本のほとんどのインフラは、戦後の高度成長期の一九六〇年代に整備されました。

インフラというのは、道路や上下水道、通信網など、社会生活を送る上でとても重要な存在です。そのインフラは、高度成長期から今日まで五十〜六十年使用されていて老朽化が進んでいる設備がたくさんあるそうです。その中でも水道管については特に深刻だそうです。水道管の耐用年数は約四十年で、現在ではそれを超えて利用されています。そのせいで、年間に約二千か所、つまり毎日日本のどこかで水道管が破裂しているそうです。しかし、様々な理由により破損した水道管を修理したり、更新することが難しくなっているそうです。原因の一つは、労働力不足です。少子高齢化の影響で約八万人いた水道事業従事者が現在は五万人を切ってしまっています。それにより、計画的に管路をつくる知識を持っている人がいなくなってしまうのです。また、国の予算もインフラの修理に回らず、不足しています。その結果使えなくなったインフラ設備をそのまま放置することも多いようです。また、データ不足や管路図の紛失も大きな影響を及ぼして修理や点検を行うのに対応が出来ないことがあるそうです。

水道管をすべて更新するには百三十年以上もかかる計算になるそうです。だとすると、耐用年数が四十年といわれているのに百三十年もかかるということは、修理が追いつかないということになります。

水道管について調べてみて、私は本当に驚きました。私が生まれた時から水道は当たり前前にあり、蛇口をひねれば水が出てきます。飲料水としても何の不安もなく使ってきました。断水というのも経験したことはありませんでした。もし、水道が無くなってしまうたら、使えなくなってしまうたら、と考えたら急に不安になりました。

そして、数週間前の台風で、千葉県の人たちが大きな被害を受け、未

だに電気が復旧していない場所があり、不便な生活を送っている地域の人たちがいるというニュースを見ながら、私の住む町でもいつ同じような災害が起きてもおかしくないのだと思いました。そこで試しに水道管について調べてみて水がどれほど大切に水道がどれほど大事なものであるかを実感してみようと思いました。

週末に一日だけ、水道を使わずに生活してみました。まず、朝起きて顔を洗って、歯を磨いて・・・と思い水道に手をかけて止まりました。毎日無意識に水を使っていることを朝一番に実感しました。そして、トイレを済ませて出てくると、母親に「トイレを流す水も水道水だよ。」と言われ私はハツとしました。飲み物はペットボトルで済ませることができましたが、食事は水を使わずに調理するのは難しく、結局、非常食として備蓄してあったアルファ米と缶詰を食べました。ただ、食後に食器を洗えずにどうしたらいいのだろうと困りました。なるべく洗い物を出さないように生活することを考えなくてはいけないのだと思いました。

洗濯物も一日洗わずにいても、ずっと洗わずにいるわけにはいかないし、お風呂も一日くらいなら入らずに我慢できますが、何日も体や髪の毛を洗わずにいるのは不快でたまりません。

たった一日だけの断水体験でしたが、やってみて感じたことは、今まで本当に何も考えずに当たり前のように蛇口から出てくる水を貴重だとも思わずに使い続けてきたという自分の無関心さに気づかされました。

この体験を生かし、これからは水道のありがたさを心に持ちながら、水を大切に使うように心がけて生活していこうと思いました。

独立行政法人水資源機構理事長賞（優秀賞）

つなぐ：水

福岡県

福岡教育大学附属福岡中学校

二年

宇野

誠洋

まるで昇り龍のようにその「水龍」は駆け上がってくる。福岡導水だ。大好きな祖父が住む久留米市を流れる筑後川の筑後大堰から私が暮らす福岡市の水瓶牛頸ダムに向けて、およそ二五キロの道のりを、上り八四メートルという高低差をもろともせず、文字通りかけハシ（八四m）となつて駆け上がる。

「水龍」は二カ所だけその姿を地上に現す。筑後平野を貫く九州自動車道を久留米へと疾走するとき、福岡都市圏の守り神であるその銀色に輝く胴体（水管橋）を見つけた瞬間、私はワクワクして誇らしい気持ちになる。

昨年私は筑後導水につながる何か所かの施設を見学した。桜満開の春に訪れた寺内ダムは、二〇一七年七月の九州北部豪雨において、水だけでなく大量の土砂や流木もせき止めた。限界水位まで五七センチに迫る中、筑後川に接続する佐田川を氾濫させまいと、朝倉・久留米の被害を最小限に抑えた。副所長さんに放流の判断の難しさをお聞きし、無事に守られた祖父母の分まで心から感謝した。

猛暑の夏に訪れた松原ダムは、雨不足で渇水だった。赤土がむき出しの湖岸を見て、毎年変わる気象状況下での水行政の難しさについて考えさせられた。大柄な所長さんに聞くと、一番大きな水門のクレストゲートは、点検以外で実際に開門した事が驚くことに一度もないらしい。渇水であっても、日頃からしっかりと準備することで初めて「いざというとき」に対処できると知った。

筑後川ダム統合管理事務所の指揮命令室には、スイッチや大型モニターがズラリと並び、リアルタイムで筑後大堰や複数のダムや観測地などが映し出されていた。専門的な天気予報図を分析しつつ、まさに統合的に筑後川を管理していることがわかった。

様々な学びの結果、最も印象に残ったのは（人）だった。水の現場では、日夜実直に水を守り、経験と知恵を駆使して判断し、複合的で緻密に水を管理し続ける人たちがいた。私たちが日々享受する安全で安心な

生活は、現場の人たちのたゆまぬ努力によつて届けられていることを忘れてはならないと思つた。

各施設の成り立ちをひもとけば、そこには必ず人々が苦悩した歴史がある。多くの犠牲者を出した昭和二八年の西日本大水害の教訓をもとに作られた筑後大堰や寺内ダムなどは、たびたび増水して暴れる筑後川を調節し、それ以降多くの市民の命を守ってきた。昭和五三年福岡大渇水の経験からも、悲願の水源としてつながれた福岡導水は、福岡都市圏二五〇万人の水の三分の一を日々送り届け、私たちの暮らしを支えてきた。人が悲しみに暮れる日も、灼熱の太陽が容赦なく照りつける日も……。人が今日まで積み重ねてきた数々の努力は着実に実を結んできたのだ。この恩恵を受ける私は、それら数々の設備を「誰のものでもない」ではなく「私のもので（も）ある」と考えたい。そうすることで、自分ごととして主体的に関わり、これからも感謝を忘れずに、水を大切にし続けられると思うからだ。

十二月、久留米の大好きな祖父がガンで天国に旅立った。四季折々の彩りを見せる高良山に幼い頃から祖父とよく登った。筑後平野に横たわる筑後川がゆったりと有明海まで注ぐ。パノラマ風景は、祖父との大切な思い出だ。

闘病生活のある夏の日、私は透明で小さなコップに氷水を入れて、祖父に渡した。祖父はゆっくりと水を口に含み、「あーうまい、ありがとう。おだやかな笑顔で、そう言った。その瞬間のコップの水が透明で美しく、「私たちは生かされて生きている」のだという感謝の気持ちで胸がいっぱいになった。

今日も福岡導水は私に水をつないでくれる。祖父が眠る久留米から笑顔を運ぶように。毎朝その遺影に供える水は、あの日と変わらず美しい。命をつなぐ一滴の水。私は人の心を潤す一滴の水のような人になりたいと思う。

入選

人々の健康と水への思いやり

岩手県 一戸町立奥中山中学校 三年 中寫 歩

ひび割れた粘土色した広大な大地に、わずかな水たまり程の水。大地と同じ色で底の見えない水を、汚れた大きな柄杓で飲んでゐる小さな子どもの姿。

冬休みの図書館で手にした「水と人々の健康」と題した、一冊の本の表紙に使われた写真は、あまりにも悲しい現実で、命を継ぐための水はとも汚れ、命を削る水だったかもしれない。日本から遠く離れたアフリカの一部では、五歳以下のこどもの生存率がとても低く、その原因の多くは不衛生な水によるものだといふことがよく知られてゐる。

私達、日本人の多くは浄水場で衛生、安全に処理された水を利用して生活しています。一日に使用する量は一人当たり約三百リットル、二リットルのペットボトルで並べるなら百五十本程になります。本当にそれほど必要なのでしょうか。節約できないのでしょうか。

九年前の震災時、被害が多かった地域で最初に配られた水が、紙コップわずか半分だけだった事を知り、山間部の私達は九年の歳月の中で少しずつ、水への感謝の気持ちや、思いやりを忘れてしまったような気がしました。反省しなくてはなりません。

米の研ぎ洗いに必要な水は、重量の十倍相当です。この研ぎ汁に含まれるヌカは、リンやチッ素などの栄養分がとても多いのですが川や海を汚し魚を死滅させてしまうというマイナス面があります。しかし、排水に流さず植木や花だん、畑にかけると肥料になるといふ事をどのぐらいの人が知っているのでしょうか。絶えず循環している尊い水を汚し、問題点を探すことなく限りある資源をとんでも無駄使いしているのです。わずかコップ半分の牛乳であっても、魚が住めるほどきれいにするには家庭用浴槽十杯分の水が必要になってきます。絵の具や墨汁で汚れた水、ドレッシングの残った皿。洗う前に、ほんの少しだけ「流した後の事。」を考えてみると、節水への心掛けにつながるような気がします。すずぎ

一回で済む洗濯用の洗剤、泡切れの良い食器洗剤。環境に優しい物がたくさんあり、それは資源を大切にすることを意識の高さから生まれたものでしょう。汚さない工夫や努力はとても大切だと思います。

河川の水質調査で県内九十パーセントの地域が「きれいな水」と判定され、今でこそ水の豊かなこの岩手も、四百年程前は作物の育たない荒地であったと学びました。唱歌、「春の小川」のモデルとなった東京の地は、詞のおもかげを残さず埋めたてられ下水が流れているのだそうです。長い年月の間に失われ、壊されていく自然。守らなくては姿を変えていくのです。緑鮮やかな大地と水のある風景、ささやきのように聞こえる穏やかな川の流れを、大切にしていかななくてはなりません。

水の惑星と言われる、地球の大部分は海水で直接飲料として口にすることはできません。豊富にあるように見えて実は限られた水なのだという事を肝に銘じて生活していかなければいけないのです。

尊い水でありつづけるよう今できる事を少しずつ行動に移し、一人一人が水への感謝の心と思いやりを持ち生活すれば、この地の川や海はもつときれいになり、いつか必ず、地球上の人達すべてが平等に、「命を継ぐ衛生な水。」を使える日が来ると信じています。

流れる川の水は、朝日に照らされ輝き、夕日を映し四季を運んでいきます。どうかこの流れが、未来へと続きますように。

入選

水資源を守っていく

岩手県

盛岡中央高等学校附属中学校

三年

細田

萌々菜

私は昨年、学校の学習旅行で台湾に行って来ました。現地に到着して一番最初に先生から言われたのが水についてでした。

「ホテルの部屋の蛇口から直接水は飲む事が出来ません。冷蔵庫の中にあるペットボトルの水を飲んで下さい。」

と言われ、部屋の蛇口をひねってみると、日本と何ら変わらない透明な水が出てきました。

何故飲めないのか。台湾人のバスガイドの方に聞いてみたところ、台湾の水道管の多くが古いもので、衛生的に水を運ぶ事が出来ないから、お腹を壊すとのことでした。バスガイドさんから、

「水道から直接水が飲めるって素晴らしいことよ。良いわね。」と羨ましがられました。台湾の水道水を飲用するには、約五分間煮沸させなければならぬとのことでした。

台湾から帰国後、私はウェブサイトで日本人の水の意識調査についてまとめられているものを見つけ、読んでみました。

世界の中で、水道水を直接飲むことが出来る国は約十五ヶ国しかなく、日本はその中に含まれています。しかし、日本は世界最大の水資源輸入国となっています。水資源の中には、「仮想水（バーチャルウォーター）」という考え方があります。食糧や工業製品の生産には、食糧を栽培するのに必要な水、家畜の飼育に必要な水、工業生産の加工や洗浄に必要な水など大量の水資源を必要とします。つまり、日本は水そのものの輸入はそれほど多くはありませんが、食糧や工業製品の輸入を通して、他国の水資源を多く消費しているということになります。

私は、目から鱗が落ちる思いでした。直接輸入するミネラルウォーター等だけでなく、そういった間接的な仮想水の消費の方が遥かに多いという事実に驚きました。

我が家では小さな庭で母が家庭菜園をしており、季節になると、ピー

マン、キュウリ、ミニトマト、オクラ、ハーブ等、年によって違います。色々な野菜を育てています。最初の何年かは水道水で水やりをしていましたが父が「もったいないなあ。」と言って、ガレージの雨どいから直接、雨水を貯めるタンクを作ってくれました。ボウフラなどがわかない工夫をしたもので蛇口付きです。母も時々、米のとき汁を「どうせ捨てるものだし栄養あるからね。」と言って水やりに使っています。私も靴を洗ったり、ちよっとしたものの泥を落とすのに使ったりしていました。先程述べた様な水資源のことなどは深く考えていない行動だったので、水環境に良いことをしていたのだなと後から思いました。

世界の中には大変多くの人々が、安全な水が手に入らない環境にあり、毎日多くの子供が汚れた水や不衛生な環境が原因で命を落としたり、毎日長い時間をかけて水汲みに行って学校にも通えない子供がいるという事実をテレビ等を通して知りました。

私達は日本がどんなに恵まれているか自覚し、感謝しなければなりません。我が家のことは、ほんの一例ですが、他にも水を流しっぱなしの歯磨きや、シャワーの出しっぱなしを止めるなど、今日からでも出来ることは沢山有ると思います。

これから先の未来、人口の増大や温暖化の影響により、水資源はますます悪化していくことが懸念されます。一人一人が意識を変えていくことが必要です。皆で取り組んでいけば、消費も膨大な半面、節水も膨大なのですから。

入選

かけがえのない水と共に

岩手県

盛岡中央高等学校附属中学校

三年

村松 一朗

九年前の今日、三月十一日、私は初めて水の怖さと大切さを同時に思い知った。それは東日本大震災。私はあの時まだ五歳で、その日は祖父の家に行った。午後二時四十六分、今までに経験したことのない大きな揺れと共に生活は一変した。私は幼かったため細かいことまでは鮮明に覚えていないが、水の二面性を知ったのはあきらかにこの時だ。祖父母の家で両親と共に共同生活を始めた時、父や母が他の飲料水や食糧よりも、まず最優先に水の確保をしていた姿がうつすらと記憶にある。そしてしばらく経ってから目にした津波の映像は衝撃だった。水が姿を変え、これほど脅威的な形となって一瞬で人や建物を流し去ってしまうなんて当時の自分にはただただ恐怖心だけが残った。

それから数年が経過し、その時より少し成長した私は、水について考えさせられる機会をもつ。新聞のある記事が目にとまったのだ。「震災後、一番急がれたのは被災地へ支援物資を送ること。その時に、おにぎりやパンなどが送られ、それはとてもありがたく命をつなぐものになったのだが、食べ物にアレルギーがある人達にとっては食べられない物も多く困っている」という記事だった。私自身も食べ物にアレルギーがあるのでその気持ちがよく分かった。そんな時でも、水はどんな人にも安全に潤いを与え、命を保つ、まさに「魔法の飲み物」だと感謝した。そして話は前に戻るが、私が五歳だった震災のあの日、いろいろな物が寸断され先が見えない不安の中、両親が何よりも早く水を確保しようとしたのは、その為だったという事が理解でき、点と点がつながると同時に、水の尊さがより深く心に刻まれた。

その他にも、私が小学校高学年の時に入団していた野球のスポ少で、真夏の練習時、喉がカラカラになった後に飲んだ水は、すうっと体に染み入る特別な感じを与えてくれた。また、大事な試合の前で目が回りそうなくらい緊張していた時に口に含んだ水が、自分に冷静さを取り戻し

てくれたこともあった。それだけでなく水は時と場合によって、味が変わることも知った。それは九歳の時。私はひどく体調をくずし、入院生活と絶食を余儀なくされた。その時は治療のため仕方がないと思いつつも、空腹に耐えきれず気が狂いそうになっていた。その時に唯一飲めた水の味と言ったら……。本当においしかった。「魔法の飲み物だ！」と改めて思った瞬間だった。

「水」とは私達にとって、どういうものなのだろうか。「水」から人類が生まれたと言っても過言ではない。およそ四十六億年前地球が誕生し海ができ、約四十億年前に生命が誕生したと言われている。その時に必要だったものが、太陽と水。微生物が誕生し、その後生命は進化を遂げ人類が誕生。そして今も尚、水は生命に欠かせない物である。しかし、その何も変わらない水が今、平等ではなくなってきた。日本は水に恵まれた国と言えるが、実は、水道の蛇口をひねると安全な水が出てくる国はほとんどないのだ。この水の格差問題を解決する為には、何をどこから着手したらよいのか、今の私には知識不足で正直分らない。しかし、これは水の怖さと大切さを知った私達を取り組んでいくべき重要な問題であることに間違いはないだろう。私達の住む地球は「水の惑星」なのだから。

二〇二〇年三月十一日。あの東日本大震災から丸九年を迎えた今日は朝からどしやぶりの雨だった。その為なんとなく暗い気持ちでニュースを見ていると、〈発生時刻の午後二時四十六分を過ぎた頃、宮城県で大きな虹がかかった〉と映像がでた。水は虹という希望さえも写したのだ。この虹は私達に水の尊さをやさしく思い出させ、未来へ背中を押してくれたのだと私はそう感じた。

入選

水を守るゝ野蒜の地から学んだことゝ

たった一度、水なんて嫌い、そう思ったことがあります。

昨年の夏、所属している劇団の合宿がありました。行き先は東松島。東日本大震災で津波の大きな被害を受けた地です。

月浜の海でめいっぱい遊んだ後に、旧野蒜駅を訪れました。旧野蒜駅とは、元々は奥松島・野蒜海岸の観光開発のために設置されていたが、津波の被害を受けて使用不能となり、現在は形はそのまま震災復興伝承館として残っているものです。八年の時を経てもぐにやりと曲がったままの手すりに看板。雑草に埋もれたままの旧線路。あまりにも寂しい光景を目にしてから、中へ入りました。一番に目に止まったのは、高い天井の近くにある、一本の横に引かれた線です。三・七メートル、と標記もあります。まさか、と思いました。それはすぐむこうにある川の、当時の津波の高さでした。この地の沢山のをさらったのは津波なのだと、紛れもない水なのだと、その頃にやっと実感が湧いたかもしれません。

その後には、伝承館のむかいにある震災復興祈念公園に行きました。ここには、この地野蒜の犠牲者全員の名前が彫られた石像があります。のべ六〇〇人。細かく彫られた名前を見て、涙が止まらなくなりました。水は東松島の美しい景色だけでなく、誰かの大切な人たちまで、何もかもさらっていつてしまったのです。

落ちつこうと、水筒を取り出しました。幼い頃からスポーツドリンクやお茶が苦手な私が水筒に入れるのは、水に限ります。冷たい水を一口飲んではずっとしました。たった今心の底から憎らしいと思った水を、私は常日頃そばに置いていたのです。思い返せば昨日も、この地を襲った月浜の海が好きでした。夜のバーベキューでこの地の水をふんだんに使っていたのご飯は、絶品でした。それだけではありません。私たちの生活は、水ありきのものなのです。

宮城県 仙台市立郡山中学校 三年 大柿 楽々

水に対して少し複雑な思いを抱きながら、合宿を終えた私は水の怖さについて調べることにしました。野蒜で見た光景以外にも、水が犠牲にしたものを知っておきたいと思ったからです。

平成三十年に全国で発生した水難は一三五六件、被害にあつた人の数は一五二九人。うち六二九人が亡くなったり行方不明となつたりしています。他の事故と比べても、水難はいつたん起きてしまうと命にかかわる重大事故になつてしまうのです。調べ進めると、水難の起きる場所と場面が分かりました。いちばん多いのは全体の五三・六パーセント。過半数をこえて海でした。魚釣りや水遊びの場面が圧倒的に多いとも分かりました。

ほとんどの件が、個人の不注意や判断の誤りが原因だったと知り、悲しくなりました。

しかし、この現実から目をそむけてはなりません。このように私たちの手によつて水を敵にしたいとは思いません。東松島の姿が変わり果てたのは、確かに水のせいかもしれませんが、水を嫌いだと思ふのも、仕方がないのかもしれませんが、そこでも忘れていけない事実というのが、たった一つあります。それは、私たちはこれからも水と共に生き続けていくということです。ならば私たちは水を好きになるべきだと思うのです。

防げることは、防ぎましょう。共に生きる水には、感謝の気持ちを忘れずに。私たちが守っていきましよう。

入選

水と共に生きる

宮城県 宮城県仙台二華中学校 三年 西原 結花

辺りを見渡すと一面に広がるヨシ。ここは石巻市にある北上川下流域の河川敷。中学二年生の初夏、私はヨシの移植を体験した。

ヨシとは、北海道から沖縄までの日本全国の湖沼や河川の水辺に大群落をつくる大型の抽水生物である。イネやムギに似ているがその大きさは4m近くまでなることもある。実際に見たヨシは大きく空に伸び、私の背丈を優に超していることに驚いた。

北上川下流域は、東日本大震災をきっかけに大きく変わってしまった。以前は琵琶湖の湖畔と並ぶ国内最大級の群生地だったが、津波で多くが流され、それによつてそこに生きる生物も影響を受けた。チゴガニやアシハラガニ、クロベンケイガニなどの底生生物が見られなくなったり、地盤沈下による河川の塩分濃度上昇によつて国内有数の産地だったヤマトシジミも絶滅の危機に瀕したりした。

ヨシについて調べるうち、私はヨシが担ってきた多くの役割を知った。その中で最も注目したのは、水をきれいにするはたらきだった。それは水中の赤潮、アオコの発生に繋がる窒素やリンを養分として吸い取ること、土の中やヨシの水中の茎についている微生物によつて水の汚れを分解すること、さらに水の流れを弱くし、水の汚れを沈めることだ。わずか3mのヨシ原で人間一人分の一日の汚水を浄化してしまうそうさ。まさにヨシ群落そのものが自然の浄化槽といえる。

水の浄化にはたたくさんの労力がかかる。きれいな水を飲めるのは当たり前なことではないかもしれない。私の叔母が暮らすカナダへ行った時のことだ。水道の水を飲もうとすると、ミネラルウォーターを買うよう勧められた。先進国のカナダでさえ水道の水が飲めないことに驚いた。しかし日本以外の国で水道の水が飲めないのはめずらしいことではないようだ。世界には、水道自体が無い国も多い。水が身近にないために水くみのために一日何時間も費やし正当な教育の権利を奪われている人も

いるそうさ。世界の約九人に一人が自宅から往復三十分以内で水くみができないという。日本の豊かな水資源を、当たり前だと思つてはいけないのだ。

水をめぐって困っている人たちが世界にはたくさんいる。どうすればよいか。私はこう考えた。地球上の九十七%以上を占める海水の利用だ。先日私が見たテレビ番組で、海水を工夫することで飲み水に変えているのを見て、これを利用できないかと考えた。調べてみると、もう既にその技術をもつ会社があることが分かった。それは逆浸透膜というフィルターシステムを使つて不純物を含んだ水に圧力をかけ純水をつくる方法だ。一般的な浄水器とは不純物の浄化能力に違いがあるようだ。日本の技術は水問題を解決する希望の光だ。

もう一つ忘れてならないことがある。それは、これまで私たちに恩恵をもたらしてくれた自然を守っていくことだ。北上川のヨシ原は震災によつて変わってしまったが、移植が続けられ、少しずつ元の風景に戻ってきている。しかしながら、ヨシを守る人々の高齢化が進んでいること、ヨシの価値や機能が広く認知されていないことは今後の課題だ。

私は今回、数株のヨシをわずかな時間で移植したに過ぎない。何か変わったかと聞かれれば、その変化は本当にわずかなものかもしれない。けれど、一本のヨシから、いろいろな視点で物事を考えることができた。日本が豊かな自然に恵まれ、その自然に育まれた水と共に生きているということ。そしてこれからも水をめぐるとは付き合っていくかなければならないということ。全ての人が暮らしやすい世界になるように、未来を背負う若者としてこれからも考えていかなければならない。北上川はやがて海へと続く。海でつながった世界を私は見つめていきたい。

入選

真夏の水とつなぐ命

秋田県 大館市立東中学校 三年 山田 七海

真夏の日差しが照りつける中、ペダルを強く蹴って家路を急ぐ。私は家に着くや否や玄関にカバンを放り投げ、早足で台所に向かった。蛇口を思いっきり右にひねると、手の器に水をためて火照った顔に打ちつける。タオルで雑に水分を拭き取ると、ステンレスタンブラーを水道水でいっぱいにし、それを体内に勢いよく流し込んだ。求めていた水分が一つ一つの細胞で吸収され、体内を潤していく。たった一杯の水を飲んだだけでこんなにも体が満たされる。このときばかりは「無味の水」でさえ美味しく感じてしまうものだ。そうしてまた、透明な液体を体内に流し込む。

蛇口をひねると透明な水が出てくる。そしてその水を口に運ぶ。私たちにとっては日常生活の当たり前の出来事である。だが、そんな当たり前を過ごせない世界が同じ地球に存在している。私はそれを一本のCMで知った。

アフリカにあるシエラレオネという国では、生活水を何時間もかけてくみに行かなくてはならない。しかし、やっとの思いでくんできた水は命を奪うほど不衛生なものだ。実際に水たまりからくんだ水を飲んで、幼い少女が命を落としていた。常識的に考えれば、水たまりの水は飲むものではない。雨水に木の葉や虫の死骸が浮かんだものを、「水」と言っているのかすら疑問に思う。だとしたら、なぜ少女はそんな液体を口にしてしまうのだろうか。その理由はたった一つ。生きるためだ。正確に言うと、生きられる可能性があるからである。人間の体の六〇パーセントから八〇パーセントは水が占めているため、水分の補給は命をつなぐために必要なことだ。そのため、生きられるわずかな可能性を信じて、少女はその液体を飲んでしまったのである。

不衛生な水に、生きる最後の可能性を感じている人々がいる。そして、家族が亡くなってもなお、生きるためにその水を飲まなければならぬ。

そしてこんな恐ろしい話も、全て私たちが生きるこの地球のことなのだ。こう考えると、私たちがいかに恵まれているかがはっきりと分かる。水が透明であること。無臭であること。無味であること。そして何よりも蛇口をひねっただけで、水が流れるということ。当たり前のよう思っていたことが、実はすぐく恵まれていることだったと改めて思い知らされる。

いつかこんな当たり前のことが世界中に広がってほしい。安全な水が世界中に行き渡ってほしい。そんな世界を迎えるために今、私には何ができるのだろうか。それはきっとこの水を大切にすることなのだと思う。水は循環していくものであるが、いつまでもそれが続くとは限らない。今私たちは「循環」という言葉に甘えて、水を無駄にしてしまっているのではないだろうか。あの少女の置かれていた状況を考えると、安全な水をしっかりと管理し、一滴も無駄にしてはいけないことに気付かされる。

私は水を飲むことに命をかける人々が、同じ地球上にすることに衝撃を受けた。それと同時にこんな世界を変えたいと思った。そして誰もが「安全な水」を飲める世界にしたいと思った。いつかあのCMで見た少女の町にも、「安全な水」が届いてほしい。かけがえのない水……。水は世界中の人々の命をつなぎ、たくさんの人々の笑顔をつなぐものなのだと私は思う。

あの時、私は「無味の水」を美味しいと思った。それは、人間の本能的なものだったのかもしれない。生きるために水を飲む。それはどこの誰にとっても変わらない。

またあの暑苦しい季節がやってくる。強い日差しを浴びて、汗だくになる。そうして干からびた体の水分の補給は、無色透明、無味無臭の「安全な水」に限る。

入選

見えてくるもの

福島県

会津若松市立一箕中学校

二年

井上 りわ

台所で母が夕食の準備をしている。その隣で私は今日学校であったことを話している。今日の夕食は鍋だ。土鍋が火にかけられ、ぐつぐつと音を立てている。おいしそうな匂いが部屋中にあふれていた。

鍋は水をたくさん使う料理だ。しかし鍋に限らず、水はさまざまな料理に使われる。例えば煮たり、蒸したり、洗ったりする時に水が必要となる。

だがこれだけではない。料理に使われる食材を作るのにもまた水が関わっている。例えば牛肉をアメリカから輸入したとする。牛を育てるには水やエサが必要となり、エサを育てるにもまた水が必要となる。牛を洗い、牛舎を清潔に保つためにも水は必要だ。そう考えると牛を育てるのに必要となる水を輸入したことになるのだ。このような水はバーチャルウォーター（仮想水）とも呼ばれる。

バーチャルウォーターとは、食料を輸入している国（消費国）において、もしその輸入食料を生産するとしたら、どの程度の水が必要かを推定したものである。例えば、1キログラムのトウモロコシを生産するには、1800リットルの水が必要となる。牛はこうした穀物を大量に消費しながら育つため、先ほど出てきた牛肉を1キログラム生産するには、その約20000倍もの水が必要となる。身近な食べ物では牛丼1杯には2000リットル、ハンバーガー1個には1000リットル必要になるというからおどろきだ。

バーチャルウォーターという考えを使うことによって国々の水のやりとりが見えるようになる。どの国がどのくらい水を多く輸出しているのか、どれくらい水を輸入しているのかが見えるようになってくる。

私たちの住む日本は海外から食料を輸入することによって、その生産に必要な分の水を、自国の水を使わないうで済んでいるのである。

バーチャルウォーターは実際に目に見える水ではないため、目の前で

流れ出る水のように「もったいない」と感じるような感覚を持つことは難しいのかもしれない。

鍋一杯の料理を作るのに必要なのは鍋一杯分の水だけではない。その食材に使われている水も考えることで私達の生活がいかにたくさんの方に頼って成り立っているのかを知ることができる。

今日の鍋の材料は、鶏肉、ごぼう、白菜、ねぎ、しいたけ、舞たけ、人参、味付けにしょうゆ、鍋のタレにはうどんと卵だ。これだけの食材ができるまでには、どれだけの水が必要となるのだろうか。そして、根を取り、皮をむき、きのこ類は石付を取ると、一体どれだけの水を捨ててことになるのだろうか。食後のデザートはりんごが待っている。私はりんごの皮をむきながら考える。皮をうすくむけば無駄は減るのだろうか。種を取るときはどうだろうか。いつそ皮をむかずに食べてみれば、捨てる部分は少なくてすむのか。また、別の日の食事のことも考えてみる。白いご飯に、おみそ汁、焼魚、ヨーグルトという朝食だった。米や油あげ、魚、煮物に入っている大根や人参、ごぼう、こんにやくなど、どれだけの水が使われているのかと考えると、今までにはなかった、食材を大切に使用しなければならぬことや、食べ物を残すということがどれだけ申しわけないことなのかと気付かされる。

食べ物の無駄を減らせれば同時に水の節約にもつながる。食べ物の裏側には水があるということ意識して、食べられる分だけを買って、食べ残しをしないことなど、水を節約できる食生活を心がけることが大切だといえる。

食料の多くを輸入に頼る日本だからこそ、食べ物を大切に、毎日のお米ひとつも大切に食べることが、少しおおげさかもしれないが、大切な資源である水を、世界の人たちと分かち合うことにつながるのかもしれない。

入選

命を守る水

群馬県 群馬大学共同教育学部附属中学校 三年 田口 郁子

私には忘れられない光景がある。

小学校二年生のとき、吾妻川で紅葉狩りをしたときに見た、水を貯める前の八ッ場ダムだ。

川の周りに広がるみごとな紅葉に見とれながら歩いていた私は、突然現れたダム建設についての看板を見て、急にさびしいような、こわいような気持ちになった。さらに歩いていくと谷のような地形いっぱい紅葉が広がっていると出た。少しづつ濃さの違う赤が重なっていて、とても美しい風景だった。しかし、その美しい風景を邪魔するかのよう

に、大きなコンクリートの柱が立っていた。

「きれいな景色が台なしだね。」
と、父は言っていたが、私はこの紅葉が、私の後ろにある街がダムに沈んでしまうのだと思うととてもこわくて、今すぐに逃げ出したいような気持ちになっていた。

学年が上がって、理科と社会の学習が始まると、ダムについて学ぶ機会がたくさんあった。そしてその中で、例えば川の水量を調節して洪水を防ぐ、水を貯めて水不足に備えるなど、ダムの役割の多くが私たちの生活を支えていることを知った。それでも、ダムを見るたびに、「この下にも、たくさんの自然や人々の生活があったのだ。」と、小さいころ見た八ッ場ダムに沈むことになる街を思いだして、いたたまれない気持ちになっていた。そしてそのうち、「本当に、こんなにたくさんダムが必要なのかな。」とさえ思った。

そんな時、私のダムの印象を変える、生まれて初めての大事件が起こった。

昨年の十月十三日、昨日から降り続く雨で家の近くを流れる利根川の水量が増えていた。周りとは比べてほんの少し標高が高く、過去に大きな水害のない地域に住む私たちは、降り続く雨や川の水位を気にしながら

も、「多分、ここは安全だろう」と考えていた。ところがその夜、ついに私の住む地域にも避難勧告が発令された。

ニュースを見ると、多くの川が増水し、他県では氾濫も起きていた。さらに、増えすぎた水を貯めきれなくなったダムが次々に緊急放流を行い、下流域では甚大な被害が出ていた。

しかし、もう外は暗い。悩んだ末に、雨の中、暗い道を移動する危険性を考え、私たちは家の二階で過ごすことにした。

結局、利根川の氾濫は河川敷の一部に被害が及んだのみで済み、私たちが被害を受けることはなかった。

それからしばらくして、驚くべきことが報道された。八ッ場ダムの水がいつぱいになっているのだ。大雨の降る少し前から試験的な貯水をしてきた八ッ場ダムが、大雨で増えた水を、計画より速いペースで貯水したことで氾濫防止に一役買ったのではないかという。

私はもうあの景色が見られない悲しさもあったが、八ッ場ダムが多くの人々の生活を守ってくれたという感謝の気持ちでいつぱいになった。こうして私は六年越しに、ダムの「本当の意味」での役割と必要性を知ることができた。

「水さえあれば二週間生きられる」というほど人にとって水は生きるために必要なものだが、同時に多くの人の生活や命を奪う凶器でもある。しかし、世界を見渡せば、手に入れることでさえ難しく、大変な生活を送っている人も多い。そんな中で私たちに必要なのは、水と上手につきあっていくことだ。そのための治水は欠かせないだろう。

日々、水があることや、治水によって安全に暮らしていけることに感謝して、水と上手につきあっていきたい。

入選

水を飲む、命をつなぐ

埼玉県

浦和明の星女子中学校 二年

北神

咲季

水泳部が始まると、プールサイドには部活仲間の色とりどりの水筒が並ぶ。喉がからからになるまで泳いだ後、水筒をつかみ、中に入った水を勢いよく飲み干す。私はその時間が大好きだ。喉をつたって、水が体中を潤し、満たしてくれるのを感じられる。

私にとって、水は生命力の源である。部活動のときはもちろん、普段の生活でも、水を飲むと体が生き返るのだ。

そんな水好きの私が、初めて厳しい現実を目の当たりにしたのは、浄水場の見学に行った後、水について調べたときだった。

数年前、浄水場を見学に行き、その設備の大きさ、そして多さに驚愕した。話をうかがうと、川やダムから取った水を沈澱、ろ過など、様々な方法を用いて浄化していくそうだ。また、ヒ素やカドミウムなどの有害物質が基準値を超えていないかを監視する役割も担っており、水の消毒もしているという。

さらに、ダムから水を取る「取水塔」、川から取る「取水せき」の写真も見せていただいた。その一枚の写真には、美しい森と川が写っていて、とてもきれいだっただけでなく、今でも覚えていて、森からダム、川、浄水場、それから水道……と、水はどこまでもつながっていくのだと分かり、そのスケールの大きさに圧倒された。

その後、水の神秘に魅せられた私は、ふとある一つの疑問が浮かんだ。世界に、安心して飲める水はどのくらい存在するのだろうか。気になり、調べてみたところ、使える水は予想よりはるかに少なかったのだ。

地球全体の水を直径一メートルの球とすると、人間が飲める水はビーチボールくらいであり、ましてや使いやすい水はゴルフボールより少し大きいくらいだという。「水の惑星」と呼ばれるこの地球でも、人間の使える水はかなり少ないという現実。人間が飲める「ビーチボール」にも入らない「茶色い水」を飲まざるを得ない地域もあるというのだから水

に関する問題は底が深く、容易に解決できるものではないと悟った。そして、安全な水を確保するため、自ら行動を起こしたのが、去年なくなった中村哲さんである。

中村さんはアフガニスタンで活動をする医師でありながら、仲間と共に一六〇〇基程の井戸を掘ったうえ、水路建設により、約一万六五〇〇ヘクタールもの土地を肥沃にしたという。当時の中村さんいわく、

「アフガニスタンの餓死の典型は、食べ物が無くて死ぬのではない。食べ物が足りず、飢えを紛らわすために不衛生な水を飲み、その結果感染症にかかる。そして脱水症状になり、亡くなっていく。」

調べてみると、アフガニスタンでは、死亡した子供のほとんどの死因が、感染症によって慢性化した下痢によるものだった。水の安全性や、飲めるか飲めないかに関わらず、水を飲まなければ生きていけない。日本から少し離れただけで、このようなことが起こっているのが現実だ。

中村さんの「百の診療所より一本の用水路」という言葉に共感しつつ、私達にとって「水」とは何か、考えさせられた瞬間だった。

前に述べたとおり、水はどこまでもつながっていく、スケールの大きい存在である。そしてさらに、アフガニスタンの実態を知ってもう一つ分かったことは「水は命をつないでいくものである」ということだ。洪水や津波もあり、水との共生は難しい。しかし、水によって得られた命、そして平穏な日々がある。安全な水が飲めるというだけで、どれ程の命が救われるのか、想像に難くはないだろう。

水を飲めば、それが命の糧となって体中を潤してくれる。だから今日も、水を飲もうとキッチンで蛇口をひねる。水で満たされたコップの中に、生命の躍動を感じた。

入選

「未来へつなぐ水」

千葉県

千葉大学教育学部附属中学校

一年

草場

美海

屋久島の深い森に踏み込んだ瞬間、私は違う世界に迷い込んだような不思議な感覚に襲われた。しばらく森の中を進むと、岩の間を流れる川に出た。エメラルドグリーンに透き通った水が流れ、遠くの方は春の光を反射して白く輝いている。そっと川に手を伸ばし、水をすくって飲んだ。その水はひんやりと冷たくて、とてもおいしかった。私は近くの岩の上に寝転がり、目を閉じた。水が流れる音がする。その音を聞くだけで、美しい水に心が洗われていくような気がした。それと同時に、私の頭の中には、インドのスラムで目にしたどす黒い川が浮かび上がっていた。

私は小学三年生の時から約三年間、インドのムンバイに住んでいた。インドでは、飲み水はもちろん、うがいをする時も水道水は使うなど両親から言われていた。家にバスタブは無く、シャワーしか浴びられない。学校にプールは無く、バスで片道一時間以上かけて遠くのプールに通う。そんな生活は、私にとってとても不便で、面倒くさく思えた。

インドで暮らし始めて一年程経った時、私はスラムツアーに参加した。ツアーでは、スラムに暮らす人々の生活の様子を知ることができた。スラムでは、一日のうち決まった数時間だけしか水が出ないこと。だから人々は、水が出る間に容器に水をためて、少しずつその水を使うということ。自宅にトイレがある人は住民の1%で、少ない公衆トイレをたくさんの人で共有していること。トイレが混み合うため、外でトイレを済ます人も多いということ。ツアーでは、印象深い景色を二つ見た。一つ目は、スラムに住む男の子達が、お風呂に入っているとところだ。屋外のドラム缶に水を入れ、そこにつかっていた。すごく嬉しそうに、水の中で跳ねて笑っていた。きつと、毎日お風呂に入れないのだろう。そんなことを考えながら、小さな家の間を進んで行った。二つ目は、スラムの川だ。川には、工場や家庭から出る汚水がそのまま流されているようだ。川の水はドロドロしていてどす黒く、水の底からブクブクと泡のよ

うなものが吹き出していて、異臭を放っている。私が今まで日本で見たきた川とはかけ離れていた。

スラムツアーを通して、気付いたことがある。それは、今まで不便だと思っていたインドでの生活が、実はとても恵まれていたということだ。それまでインドの生活に不満を抱いていた自分が恥ずかしくなった。水道水がいつでも好きなだけ使えて、シャワーを毎日浴びられて、家に清潔なトイレがある。それは、とても幸せなことだったのだ。

国連によると、世界には河川汚染により健康被害をうけている人が約三億人いるそうだ。私はインドに行く前に、腸チフスやコレラの予防接種を受けたが、インドの水がもつときれいであれば、予防接種は必要なかったのではないだろうか。また、このスラムには水道が通っていたが、世界には水道が無く遠くまで水をくみに行く人や、安全な水を得られずに苦しんでいる人が大勢いる。しかし日本では、安全な水を簡単に得られるため、水のありがたさを忘れてしまいそうになる。だが、水に恵まれているからこそ、もつと水を大切にしていくなさそうか。

私は屋久島で、本来の水の美しさを知った。屋久島では、島の自然を守るために募金活動をしたり、観光客向けのポスターを作ったりするなど、様々な取り組みが行われていた。こうした活動があったからこそ、屋久島の美しい水が今まで受け継がれているのだろう。今の私がスラムの川をきれいにするために活動するのは難しい。けれども、今まで受け継がれてきた美しい水を汚さずに、未来へとつないでいくことならできると思う。そのためにも私は、インドや屋久島で気付いたことを忘れずに、これからもずっと水を大切に使いしていきたい。ありがたさを、忘れずに。

入選

水から自然を考える

東京都

東京大学教育学部附属中等教育中学校

三年

棚部

さわ

私の父は釣りが大好きだ。休日は海や川に釣りをしに行く。私も小学生の頃、釣りに連れて行ってもらったことがあった。生きた餌を針につけたり、魚がなかなか餌に食いつかない時に辛抱強く待ったり、釣れるポイントを探したりと様々な体験をし、釣りの楽しさ、自然の美しさを知った。

川にはタナゴという魚がいる。父はこの魚が特に好きで、釣ったタナゴを家に持ち帰り飼育してしまうほどだ。タナゴはこの川にもいるわけではなく、水草や二枚貝があり、かつ、水の流れが穏やかなところに生息している。最近、タナゴがたくさん釣れる川が護岸工事されてしまったそう。タナゴポイントを一つ失い、父も私もとても悲しんでいた。そして、護岸工事をするとなぜタナゴがいなくなってしまうのか疑問に思い、調べてみることにした。

護岸工事とは、川の側面や底にブロックを設置し、増水によって岸が削られて、川の氾濫を防ぐための工事のことを指す。ブロックを設置するだけで、人々が安全に安心して暮らすことができるのであれば、とても合理的だ。しかし、人間にとっては良いことであって、自然にいる動物のすみかを奪ってしまうこともある。ブロックを敷く前に、ポンプで水を汲み上げたり、土をどかしたりする。その際に、その川にいた動植物やすみかが根こそぎ奪い取られてしまい、護岸工事が終わった後も生き物の生息地としての役割を果たせなくなる。そして、私も大好きなタナゴがいなくなってしまう。護岸工事はある意味では自然を壊す工事なのだ。

しかし、自然を壊してでも護岸工事を行う必要がある。去年の十月に台風十九号が日本を襲った。その日から約一週間後、私は多摩川を電車で横断した。直接の被害を受けていない私たちは、台風の恐怖を忘れかけていたが、多摩川の泥や倒れた木々の生々しさにゾッとした。岸と川

の境目が分からないくらいに水量だった。もし、堤防やブロックがなかったら被害はもっと大きくなっていただろうと想像した。

つい先日また電車で多摩川を横断した。台風からもう半年近くも経っているのに、まだそこには、台風によって運ばれてきた流木の大きな塊がそのままになっていた。そのすぐ横で、散歩をしたり、野球をしている人々が見えた。私はその光景を見てなんだか不思議な気持ちになった。人々の平和な活動のすぐ横に、自然の恐ろしい光景があった。この馴染みのない感覚は何なんだろうと考えた。私は多分、感覚が鈍っている。生まれた時から都心部に住んでいることもあり、自然の脅威を肌で感じることはあまりなかった。新潟の山奥に旅行に行った時、増水しているわけでもないのに、ごうごうと流れる濁流に、足がすくんだの思い出した。その時私は「ここに暮らす人は、いつもこの川と一緒に暮らすと日常なんだ」と驚いた。いつ荒れるかわからない自然と共に暮らすということが、私には信じられなかった。私には、自然といつても人工的に守られたものの感覚しかないのだろうということに気がついた。だから、「護岸工事が自然を壊す」や「人間の命を守るためには工事が必要だ」という相反する出来事に出会った時、行き詰まってしまう。でも、両方あって当たり前なのだ。私たちは、美しいものや豊かなものを自然に求めながらも、生活していく以上は、自分たちの命を守るために自然に手を加えざるを得ない。それでも自然の力には逆らえないこともある。これが大前提のはずだ。でも、便利な生活をしていると忘れてしまう。自然に対する鋭い感覚を失わないまま、最新の科学技術を解決策につなげていくことが、これからの私たちに必要な力なのだろうと思う。

入選

水の国に生きる身としての「義務」

東京都 東京大学教育学部附属中等教育中学校

三年 増尾 諒一

「水害に強い町づくりを目指して」

これは僕が半年間にわたって取り組んだ個人研究のタイトルである。中野区を調査対象としたフィールドワークや文献調査を交えて資料収集を行い、水防の歴史や治水事業について深く学んだ。研究結果から、水害の恐ろしさを知ると共に水防設備や区民の意識がいかに重要であるかを痛感した。

研究の一環で、東京都が管理する神田川環状七号線地下調節池とそのシステム制御を担う善福寺川取水施設を何度か訪れた。訪問の際に調節池内を見学したが、そこには息をのむようなスケールと管理の行き届いた制御システムが施されていた。見学中に内壁に目をやると、一帯は無数の白線やカタカナの記号で埋め尽くされていた。関係者の話によるとそれらの記号は修復場所を示す「目印」であるとのこと。それをもとに点検や破損場所の修復を重ねているそうだ。

環状七号線地下調節池は神田川をはじめとする沿線の三川の洪水を貯蔵し、水害被害を防ぐことを目的として昭和六十三年から平成二十年にかけて建設された。トンネルの延長と内径はそれぞれ四・五キロメートル、十二・五メートルと圧倒的な規模を誇る。施設建設前と建設後では浸水面積が約二十一分の一浸水家屋は約六十八分の一と大幅に減少しており、多大な減災効果をもたらしている。

昨年九月頃に台風十九号をはじめとした猛烈な台風が日本列島を襲った。各地で大雨洪水警報が発令され、河川はいっせいに氾濫してもおかしくない状況下に置かれていた。しかし、中野区は、様々な大規模河川が流入しているものの氾濫危険区域への指定は免れた。これも環状七号線地下調節池の効果であると考えられる。以前、水防の歴史について区民センターの職員と町内会の会長に話を伺ったことがある。どちらも調節池について言及し口を揃えて感謝の意を述べていた。「施設が完成してから

水害被害は大きく減少した。感謝している」と。環状七号線地下調節池の存在が区民の心の拠り所となり、安らぎと安全な生活環境を与えている。水防設備の人々にもたらす影響力が実に偉大であるかを手に取るように分かった。

水防設備の効力や重要性について前述したが、これに頼ってばかりでは水害被害の抑制が完全に図れるとはいえない。問われるのは住民の迅速な「行動」と「備え」である。

二〇一一年三月十一日、岩手県釜石市の釜石市立釜石東中学校の生徒と鶴住居小学校の生徒・児童が押し寄せる波から逃げ切り、奇跡の生還を果たした。中学生が先導して避難の活路を開き、生徒・児童のみならず近隣住民を含めた生存率は九割を上回るといわれている。三陸海岸地域には「自分の命を自分で守るために各自でんばらばらに逃げろ」という意味の「津波てんでんこ」と呼ばれる言い伝えがある。また、釜石市では避難の三原則を定めることで、住民の意識を固めていた。

一、「想定にとらわれるな」

一、「最善を尽くせ」

一、「率先避難者たれ」

津波発生時、迫りくる波は海岸沖の防波堤を飲み込み、市街地を襲った。水防設備が機能しない中、日々の備えが被害の拡大を抑え数多の命を救ったのだ。

日本は四方を海に囲まれた「水の国」である。海上交通を利用した物資の流通や貿易が盛んであり、新鮮な魚介類を手軽に味わえるなど、日本の生活は海の恵みによって支えられている。しかし、水の国に生きるということはそれ相応の危険が伴うことを自覚しなければならない。地域の水防設備に感謝し、常に水害に備え行動する。こういった取り組みに尽力することこそが水の国に生きる身としての「義務」である。

入選

水と密接な関係を持つ森林

神奈川県

慶應義塾普通部

二年

丸岡

龍生

水の惑星と言われる地球。表面積の七〇%が水で覆われている。しかし、そのうち人が使える水はたった〇・〇一%しかない。地球上の水を風呂桶として考えると、飲み水として使えるのはたった一滴程度らしい。最近テレビのCMで、汚れた水を飲むしかなくそれが原因で死亡したという、ナレーションを耳にした。世界中には安全な水を飲む事ができない人が十二億人もいるというのだ。それを考えると、私たち日本人は何も自由なく水を使えていて、それはとても恵まれている事なのだと改めて気付かされる。ただ、だからといって使いたい放題というわけにはいかない。水は限りある資源だからだ。

水がどのようにして私たちの所にくるのだろうか？ 海水等が蒸発し、雨や雪になって地上に降り、川や海に流れてまた蒸発するというサイクルを繰り返すなかで、川に流れ込んだ水を農業用水や工業用水、私たちの飲み水として利用している。川に流れ出す水には森林が大きく関わっている。森林の土壌はスポンジのように、降った雨を土の隙間に蓄えてゆっくりと川へ送り出してくれる。そのため、雨が降らなくても川が枯れることがない。川の流量が安定しているのは森林のおかげなのだ。より一層、森林を守っていく必要がある。

では、私たちにできることは何か？ まずは森林の伐採を削減する為に、無駄に紙を使わない、使い捨てするものは使わない、といったことが考えられる。さらに森林を補うために、植林に参加することもあるだろう。昨今世界中で問題となっている地球温暖化や酸性雨も森林を枯らしてしまう原因になりうる。つまり、二酸化炭素やフロンガスの排出を防ぐための行動、自動車やエアコンの使用を控えるなども間接的に森林保護に繋がる。日々の生活の小さな積み重ねが、水資源確保に

繋がるのだ。日本は海外の木材に依存している。私たちが意識することは、日本だけでなく海外の森林保護、水資源の確保にもつながっていくだろう。

森林には、水を貯蓄する役割以外にも、水を浄化する役割がある。その浄化作用を人が行うとなると十四兆円にもなるという。森林という自然の力は計り知れない効果を生み出してくれる。土の中の隙間にいる微生物によって雨水に含まれるゴミや埃が分解され、土の中のイオンによって窒素やリンが取り除かれ、ミネラルを多く含む中性の水となるのだ。この浄化作用は森林というよりは森林を支える土壌が重要である。落ち葉やミミズ、ダンゴムシなどの小さな虫、動物の糞や死骸も土壌に影響する。私たちは自然を大切にすることで、森の生態系を壊す事が無いように気を配ることも重要なのだ。森林を切り開いて道路や施設を作ると、開拓された部分の森林がなくなるだけでなく、そこに住む動物や昆虫には大きな影響を与える。動物や昆虫がいなくなってしまうこともあるし、壊れた生態系により動物が森林を破壊してしまうことも起こりえる。森に住む鹿が増えすぎてしまい、植物を食い荒らし、森林が風化してしまうということも実際に起きている。森林を保全する、生態系に影響を与えない、この二つを綿密に考えて実行するようしなければならぬ。

水資源を守るために、私たちにできること。それは、単に水を大切に使用することだけではない。森林を守るために何ができるか意識して日常生活を送ることもとても大切なのだ。

入選

水とは何か

新潟県

新潟市立中野小屋中学校

二年

高橋

穂花

校庭の桜の葉が青くなり照差しが強くなってきた。おだやかな風景が広がり、昼休みの時間になった生徒たちはいつせいに外へ走り出した。そのころ私は誰もいない教室でゆっくり流れ、光が反射し美しく光る川をながめていた。どんな時も大きく流れていく川を見ていると心がすごくおちつくので、私は川や自然が好きである。

今から2年前。私は総合的な学習で、学校の近くを流れる西川について勉強した。西川は信濃川からつながる川で新川立体交差まで通っており、小瀬小や笠木小などもつながっていて、地域に愛される存在の川なのだ。近所の方に西川について聞いて見ると昔は子供たちが川に入り泳いだりすることもできたし、メダカなどきれいな水でしか暮らせない魚たちもいて透明な水が流れていたそうだ。今ではプラスチック、ペットボトルなどや自転車、冷蔵庫、ときにはせんざい、油、野菜などが川から流れている。私は近所の方から話を聞いてこのままでは川も海も大変なことになると思った。自分にできること、どんなに小さいことでも今からやれることを探すことにした。

まずはインターネットから調べた。人間が1日にとる水の量(成人)は約2.5L。そのほかにも、牛乳(500ml)1本とたくさん水を取っていると分かった。次は家庭で使う1日の水の量だ。約219Lで家族が1人ふえればふえるほど水をどんどん使うことが判明した。最後に全世界に水道が通っているか調べた。するとアフリカ中心に水が通っておらず、水を使えない国があることも分かった。

また、図書館にも行き、水について調べた。水はミネラルなどがふくまれており、栄養が入っていることが分かった。水道が通っていない国はどうやって水を飲んでいるのか。この疑問も本を見つけ探そうと思った。

「あった。」

その本をめくって見るとアフリカの子供の写真が最初のページに出てきた。次のページをめくるとまた子供の写真だった。その子は涙いっぱい目にためていた。髪がながかったのが少女である。少女の後ろには姉のような女の人が横になっており、少女の手にはバケツがもたされていた。バケツには茶色く濁った水が入っていた。私は次のページをめくり、本文を読んだ。どうやらアフリカの一部には水が行き届いてないらしく姉の病気をなおすため池の水を妹がくみ、それを姉が飲んだことで姉が死に至り、妹がくみやしさにたえきれず泣いている写真らしい。この本を読み終えた私も涙でいっぱいだった。同じ地球という、水の惑星と呼ばれる星に住んでいるのに、たった一滴の、滴で尊い命を失っていく人がいることを知りショックだった。とても私にとって辛い話だったけど、自分から行動したことであることを学べた。

自分から動き、地域の命を守るべきだと判断し調べたりできたのはとてもよかつた。でもまだ終わりではない。これから先どうするかが大切になってくる。1人1人の協力で誰かが命をうばわれないよう、そして川や海などの清潔性を保てるようにしていかねばならないと分かった。

もし、水とは何と言われたらあなたは何と答えるだろうか。私は水は人間が生きるため、生き物が生きるための大切な資源、全ての命を守り育ててくれる最高の自然からの愛と答えよう。だから自分ができることから、川や海の清掃、ゴミ拾いなどをしよう。あなたがさし出す手でこの先の未来が変わるだろう。

入選

水がある幸せ

富山県 高岡市立戸出中学校 二年 稲場 結奈

私の中学二年のスタートは、コロナウイルスの為、先の見えない休校から始まった。首相官邸から出された三密を避けるために家で過ごしTVを見る事も多くなつた。報道番組で日本やアメリカ・イタリアなど各国の対策や取り組みが流れていた。その中にアフリカの母娘が道端に座り茶色く濁った水たまりで手を洗いながらインタビューに答えている。

「手を洗い予防しろと言われても、手を洗う水はどこにあるの。教えてほしい。」

と涙を流し怒りに満ちた表情で言葉を投げかけていた。そこには命を守る水がないという現実があった。私は言葉を失った。

私たちは、当たり前のように手洗い・お風呂・食事・洗濯・トイレ・掃除・花の水やりなどたくさんのお水を使い生活している。蛇口をひねると常にきれいな水が出てくるのが当たり前のように思っている。

私は小学五年生の夏休みに富山市の浄水場お仕事体験に参加し水が安定的に供給される仕組みや生成される多数の過程を学んだ。

「水は繊細なもので、平地では晴天でも山が雨ならば、水質の変化があります。それは、自然界で起こる地震や台風・雨・雪全てでいえます。私達は皆さんが安心して飲んで頂けるレベルまで調整して供給しています。」と説明して頂いた記憶がある。水は貯水地から取水した水を浄水場へと運び、さまざまな浄化・消毒を行い、厳しい品質検査等を経て上水道へ供給される。水は二十四時間体制で多くの高度な処理を経て私たちの所に運ばれてくる。今改めて浄水場の役割と、そこで働く人に感謝し、水に対する意識が強くなった。

もし、水道が整備されていなければ、TVに写し出されたアフリカの母娘のように道端の茶色く濁った水たまりで目に見えないウイルスの恐怖に脅えながら手を洗っていたのかもしれない。蛇口から安定

的に出てくるきれいな水に感謝する一方で、恵まれた日本に住んでいる私たちに何ができるのか今一度考えるべきことがあると思う。日本のように生活の中に水がある国を増やし、困っている人たちに何ができるのかを考え、先進技術を通して貢献していかなくてはいけない。日本の水について調べてみました。日本では、あたり前のように水道水を飲んでいきます。しかし日本のように水道水をそのまま飲む国は世界に十五カ国しかない。「水道水の安全性」これは私たちの水道水の源、水道局が日々きれいな水道水を安定して配してくれているからだ。しかし、安定供給してくれるからといってたくさん使うことは問題がある。日本の水資源は年々減少していて、いずれ水不足になるかもしれないということもわかった。

今、私たちにできることは、水を大切に少しずつ使っていく。私たちが節水を続け、生活の中に水がある幸せを感じ、水を使う時には、水不足で困っているたくさんの方が私たちと同じ地球上にいることを忘れてはいけない。世界中がコロナウイルス一色で感染しないように、日々手を洗う機会が増え、水道水を使う頻度が多くなった。今一度日本という恵まれた環境と、いつも私たちの生活に安定して供給される水道水に感謝したい。

入選

後世につなぎたい宝物

岐阜県 高山市立荘川中学校 一年 田口 亜美

高い橋から見下ろすと、透き通る川の中に鮎やイワナ、ニジマス、ヤマメなどが泳いでいる。私の住んでいる高山市荘川町の宝物である庄川の風景です。これらの魚が泳いでいるということはその川がきれいな水であるという証明になります。さらに、河川環境によって味が異なるといわれている鮎の味を比べる「清流めぐり利き鮎会」というコンテストでは、二年連続で準グランプリをとっています。つまり、庄川の水はきれいで質がいいということになります。また、荘川町には特産品として、そばがあります。庄川のきれいな天然水を使って作られたそばはとても有名でもおいしいです。私は小学生の時、地域の講師の方に学校に来ていただき、実際に庄川の水を使ってそば粉をこねるといってそば打ち体験をしました。そのときに「荘川町のそばってなんておいしいのだろう。」と感動しました。またそのときに使ったそば粉は私たちが種から育てたものを使用しました。そばがすくすくと育つのも庄川のきれいな水がたくさん使われました。荘川町のそばがおいしいのは、庄川の水のおかげだとそのとき実感しました。私にとつて荘川町のきれいな川は宝物であり、これが無くなることは考えられません。しかし、この光景が当たり前ではないことに最近気が付きました。それは、家族で西濃へ行った時のことです。町の中を歩いているときにふと川を見ると、水がよどんでいてとても汚れているのを見かけました。その光景に私は衝撃を受けました。そして、私の町の庄川の美しさを守っていきたくて強く思いました。

しかし、ある時荘川町にごみ処理の最終処分場ができるかもしれないということを知りました。その話を聞いた時にはあまり気にしていませんでしたが、じっくり考えるとごみ処理の最終処分場ができるということは、川の水が使われ汚れていくのではないか、そのためにきれいな水にしか住めない鮎などの魚はすむ場所を失い、いなくなつて

しまうのではないかと、また、そばなどの農作物にも影響があり、育たなくなってしまうのではないかと、私たちがきれいな水が飲めなくなってしまうのではないかとという不安におそわれ、私は少し怖くなつてしまいました。

そこで私はこの美しい庄川を残すために自分にできる身近なことがないか考えてみました。そこで二つのことを考えました。

一つ目は、荘川町の自然を大切に守ることです。荘川町の九十四パーセントは、森林であり、私たちはその自然に囲まれて生活しています。森林は、水をきれいにし、私たちの住む世界の空気を浄化する役割をしています。荘川町では、毎年五月十六日にごみ拾いをおこなって、地区の清そうが行われています。今年は、コロナウィルスの関係でごみ拾いはありませんでした。ですが、個人的にごみ拾いを行いました。飲み残しのかんや、ペットボトル、食べ残しが入ったビニール袋など多くのごみが捨ててありました。ごみによって土じょうが汚染され、荘川町の景観もそこなわれます。ちよつとしたことかもしれませんがごみ拾いを行い、自分自身もポイ捨てをしないことは自然を守り、きれいな水を守ることにつながると思っています。

二つ目は、水に関心をもつことです。毎日登下校のときに、庄川の水の汚れや生き物の変化、ゴミが落ちていないかなどを見ていきたいと思えます。また、季節ごとに変わる景色の美しさや大雨のあとの川の姿の変化を感じ取りたいと思えます。その他にも、水に関するニュースを見て、水についての関心をもてるようにしたいと思います。

このきれいな庄川を守るために、自分にできる、自然を大切にすることや水に関心をもち続けることで、荘川町の宝でもあるきれいな水を後世につなぎたいです。

入選

亀から学んだ地下水の恵み

静岡県 静岡市立長田南中学校 一年 近藤 沙彩

私の家では、半年ほど前から、亀を飼い始めました。亀の世話が一番大変なのは、水そうの水かえです。亀は水そうをすぐ汚すので夏は毎日水かえしないといけないし、水道水で小さな亀を飼育する場合は、一日くみおきた水を使わないといけません。私の家で飼っているのはまだ小さな亀なので、毎日くみおきしなければならぬし、大変だなあと思ったことを、私は父に話しました。すると父が

「うちの水は地下水だし、くみおきしないでいいんじゃない？」

と言いました。私は驚きました。へえ、地下水なんだ。地下水って山とかでしか飲めない貴重な水じゃないの。と、思っていたからです。また、なぜ地下水では亀を飼えるのに、水道水ではくみおきしないと飼えないのかということ疑問に思いました。そこで私はそのことについて調べてみました。すると、次のようなことが分かりました。

地下水と水道水との大きな違いは、水に殺菌処理が加えられているかどうかです。地下水はその名のとおり地下からくみ上げられていて、自然によつてろ過されています。さらに地上の不純物が入ってしまう恐れがほとんど無いので、殺菌の処理がいりません。それに対して水道水は川や池などから水をくみ上げているため、汚染されている可能性があり、薬品で殺菌する必要があります。薬品は紫外線をあてれば害がなくなりませんが、この薬品が亀に害を与えてしまうのです。この薬品は人にはほとんど害がなく、亀も大人になればくみおきしていない水道水で飼うことができるようですが、このような薬品を使わなくてもきれいな地下水は、すごいものだなと感心してしまいました。

ここまで調べてみて、もうひとつ疑問に思うことができました。それは、地下水はいつから利用されているのかということです。昔は薬品で川の水を消毒することはできなかったでしょうから、きれいな地下水は、重宝されたのではないのでしょうか。

調べてみると、地下水は、弥生時代から利用されていたということが分かりました。さらに、平城京ではもう、一軒ごとに地下水をくみ上げる井戸があつたそうです。何となく大昔から利用されているんだろかなとは思っていましたが、まさか弥生時代から利用されているとは思わなかったのです、とても驚きました。それと同時に、地下水は、私達の生活に欠かせないものなんだと強く感じました。

ここでまた、新しい疑問が生まれました。私達の生活に欠かせない地下水は無限に使うことができるのでしょうか。答えは、「できない」です。日本ではあまり地下水が減っていることは話題になりませんが温暖で乾燥しているインドやヨーロッパ南部、アメリカ西部では地下水がなくなる可能性があると言われています。そしてそのような地域では、地下水を利用して私達の食料のほぼ半分を生産しているのです。もしこの地域の地下水が枯れたら、日本も大変なことになります。さらに日本でも、地下水が少しずつ減ったり、家からの汚水や土にふくまれる化学物質で地下水がよごれてしまつたりしたということも起きています。このことを知ると、じゃ口から流れるいつもの水がものすごく貴重で大切なものに見えるようになりました。

地下水はずっと昔から私達の生活になくならないすばらしい自然の恵みだと思います。しかしその地下水がさまざまな理由で減少しています。このことに対して私ができることは水を大切に使うことだと思つたので、本当に、本当に水を大切に使う、私に考えるきっかけをくれた小さな亀をいつまでもきれいな地下水で飼つてあげたいと思つきました。

入選

諸刃の剣「水」

二十九年六月、オーストラリア南東部で森林火災が発生した。その火災は、日を重ねることに悪化し、同年九月にはオーストラリア全域に及ぶ大規模森林火災へと発生したのだ。その被害は凄まじく、類焼面積は十万七千平方キロメートル以上、建物被害は五千九百棟以上、死者は二十九名にまで拡がった。更に、オーストラリアに生息する貴重な野生動物は十億を超える生命が失われたと推定された。雄大な自然を壊し、多くの尊い命を奪った森林火災の様子は世界各国で報道がなされ、私も幾度か目にした。多くの犠牲者、犠牲動物を出し、人々を日々不安や心配に追いやった火災を収めたのは、意外なものだった。それは、シドニーで起きた三十年ぶりの豪雨であった。一瞬疑ってしまふような話だが、これは紛れも無い事実なのである。実際衛星画像を確認すると、東部を中心に赤く見えた火災箇所も、劇的に減っていることが分かる。つまり、空から降ってきた水の恵みにより、甚大な火災を食い止め、鎮火への大きな兆しを私達に示してくれたのだ。古く昔から雨という空からの恵みは、人々の生活を支えてきた。そして時に、このように人々を救ってくれることを身に染みて感じ、私は深く感銘を受けた。

しかし、雨は常に私達の味方であるとは限らない。二十九年九月、関東や東北を中心に猛烈な被災をもたらした台風十九号が上陸した。この台風により、各地方に記録的な大雨が降った。この雨は、前述の「恵み」の大雨とはまるで違い、人々の普段の生活をも揺るがす「化物」の大雨であった。それに伴い、河川の水の量も溢れんばかりに増えた。そんな不安に包まれた中、私はただテレビで放送されるニュースを見ることでしかできなかった。すると速報で、

「関東甲信越のダムで緊急放流が開始される。」

という報道がなされた。私の不安は一気に増し、直ぐに報道の内容について調べた。落ち着いて説明を読むと、

愛知県 扶桑町立扶桑中学校 二年 真野 聡真

「ダムに流れてくる水の量が危険水準に達すると、その量と同じ量を下流に流す法律に基づいた操作。」

とあった。私は河川の水量が異常に増えても適切に対応できるよう定められていたことを知り、とても驚くと共に安堵した。

一方で、雨による被害は、大雨に限ったことではない。同年春に、例年のような降雨が無かったことから、愛知県と静岡県に水を供給する豊川用水の水がめ、宇連ダムの貯水率がゼロパーセントとなった。ダムの貯水池には、湖底がはつきりと見え、ダム湖に沈んでいた橋が見えるなど深刻さを物語っていた。供給される水を失った人々はこの先どのような生活していくのか、そう思い関連記事を探すと、

「隣にある天竜川から水をひき、佐久間導水を利用して水を確保する。」と書かれていた。普段は想像できない渇水の状況を前提とし、対応策ができたがっていたのだ。これには私も声をあげて驚嘆した。

このように、雨がもたらす「大雨」と「渇水」の被害は毎年大きな爪痕を残していく。しかし、私達の知らない所で、最善の対策が練られ、最善の対策がなされていることを知り、水害が抑えられていることや安定して水が供給されることに改めて感謝しなければならぬと実感した。前述の如く、人々の生活を支え、人々の命を守る水は諸刃の剣。一人一人が意識して水と向き合っていかなければならない。今私達ができることは、水について知ること。これからも私達は水の恩恵を受け、命の源「水」と共に生きていけることを、切に願う。

入選

水道水がとどくまで

三重県 高田中学校 二年 作田 滯

朝八時、バシヤバシヤと音を立て、顔を洗う。ひんやりとした水が肌にしみて心地よい。今日も私は水と暮らしています。流れる水の音を聞きながらふと思いつく。水道から出る水が透き通っている。安心して飲める。当たり前のように思えてしまうこれらのことは、世界では決して当たり前ではない、ということ。

ジリジリとした暑さをスパイシーな香りが吹き抜ける、タイ・バンコク。父の転勤によりタイに移り住むことになった私はタイの、日本との水事情の違いに大きく驚きました。タイでは水道水が飲めません。そのため、飲用水として使う場合は浄水器を通す必要があります。食器は一度水道水で洗いますが、使う時は、もう一度浄化した水でゆすがなければなりません。浄水器に溜まった汚れを見た日、私は衝撃を隠せませんでした。泥のような濁り切った茶色、生臭さ、小さな埃のような何か、塩素の臭い……。こんなものが水道水に含まれているのか、というショックとなぜ汚れてしまうのだろう、という疑問が頭の中を駆け巡りました。なぜタイの水道水は汚れてしまうのでしょうか。社会見学で訪れた、「バンケン浄水場」でその答えを知りました。浄水場で働く人の話によると、実はタイの浄水場で浄水されてすぐの水は飲むことができるそう。タイの水道水自体はWHOの水質基準を満たしており、水源、浄水場など検査がなされていると言います。しかし、蛇口までの配水管の衛生状態に問題があるため、水道から出る水の水質が悪化しているのだと聞きました。実は水道水が飲める国はたったの十五ヶ国であり、私たちのもとに安心・安全な水道水が届けられるまでには、長い道のりがあったのです。日本で水道水が飲めることは決して当たり前などではなく、そこに携わる多くの人々の努力の賜物なのです。それに気付かず、感謝を忘れていた自分の見ていた世界が、小さな小さなものと思えました。

「水道水が飲める。」までのハードルはそれだけではありません。世界

で問題となっている「水不足」は、SDGs、持続可能な開発目標の一つとして挙げられています。日本で暮らす私たちにとって水不足の問題はあまり実感のわかないものかもしれませんが、現状、世界ではきれいな水道水はおるか、水自体が不足して利用できずに苦しめられている人々が多くいるのです。水道水が飲める国は十五ヶ国、しかしそれ以前に二十億人が管理された安全な飲み水を得ることができていません。私はこの事態を重く受け止めるべきだと思います。この事態を改善していくために、一人一人が問題に真剣に向き合い、危機意識を持って取り組んでいくことが必要なのではないでしょうか。

水道水が自分のものに届く。当たり前のように感じられるその裏側には、水に携わる全ての人々の“努力”があるということと、彼らへの感謝の気持ち。また、一方で水不足によつて水が手に入らない人々の“涙”が今もどこかで流れているかもしれないという現実。これらは決してわすれてはならないと思います。そして、水を大切に使いながら、自分もいつの日か水の未来のために貢献できることを考えていきたいと思いません。

入選

まずはあなたの意識から

滋賀県 大津市立唐崎中学校 三年 野平 ゆり

私たちが毎日何気なく使っているプラスチック。それが今、私たちの生活を脅かす存在になりつつあることをご存知ですか。

私がこのことを知ったきっかけは、新聞の特集でした。そこには浜辺に打ち寄せられたプラスチックゴミを拾うボランティアの方の「思い」が書かれていて、私はプラスチックという身近さから興味を持ち、昨年、夏休みの自由研究の題材として調べることになりました。

その過程で目にしたのは、胸を突き刺すような動画でした。そこにはストローが鼻に刺さったウミガメがストローを抜くときに苦しむ姿が映されていました。私は、この動画にショックを受けると同時に、何かしなないといけない、という危機感に突き動かされたのです。

まず私は、この問題を正しく「知る」ことから始めることにしました。私たちは年間八〇〇万トンものプラスチックゴミを海に流出させていて、このままだと二〇五〇年には海にいる魚全ての重量を超えてしまうといわれているそうです。そして、この問題は海だけにとどまりません。私たち滋賀県民のうみ「琵琶湖」にも広がっているのです。調査によると、琵琶湖の湖底にあるゴミの七割以上が日常生活に身近なペットボトルやレジ袋などのプラスチックであることが分かったそうです。

しかし、なぜこんなにも海洋プラスチックが問題視されているのかというと、プラスチックゴミは海や湖に捨てられることにより生物の脅威へと豹変するからです。

海や湖に捨てられたプラスチックゴミは、波の力や紫外線の影響などでとても小さく砕けていきます。この状態をマイクロプラスチックと呼ぶのですが、恐ろしいことに有害物質が吸着しやすいという性質があるのです。小さくなって一旦私たちの視界から消えたマイクロプラスチックは、有害物質と共に魚たちの体内に蓄積され、その魚を食べる、我々人間の体内にも蓄積されつつあるというのです。

これを知って私は、小学校のフローティングスクールで先生から聞いた「自然には勝てない」という言葉を思い出しました。人間が自然を顧みず、傲慢に利便性を追求した結果、人間を苦しめ、罪なき生物までも苦しめるのです。決して人間は、自然の上に立ち、思い通りに操ることはできないのです。そのことを裏付けるように、気温上昇による異常気象などの、自然の報復とも言える状況に、今世界は陥っているわけですから。

そこで私はまず、自分の目で事態を確認するため、琵琶湖のゴミを調べてみることにしました。調べた浜辺は、何度拾っても拾っても、汚れたペットボトルが打ち寄せられていて、事態の深刻さを痛感しました。

私は毎日この琵琶湖の水を口にしています。となると、私も知らず知らずにマイクロプラスチックを口にしていて、私の体内に溜まっているのかもしれない、そう思うともう他人事とは思えなくなりました。

しかし、この問題は地球温暖化などと違って、目に見える形で被害を受けた人が少ないため、悲惨な状況を知らない人も多く、危機感が少ないというのが現状です。ですが、誰もが、プラスチック製品を使うことによって、この問題に加担しているのだという当事者意識を持つことで、解決の第一歩となるのではないのでしょうか。

まずは、今、ここで私の思いを目にするあなたに、次にその周りの人達に、そして世界中に、この思いが広がってほしい。その連鎖が、きっと青い水の惑星である地球を、そして私たちを救うことにつながるはずですよ。

さあ、今こそ、共に立ち上がりましょう。

入選

当たり前の中には

大阪府

大阪教育大学附属平野中学校 一年

引地 奏葉

「水は地球上に無限にあつて、使うだけ。」私はそう思っていた。しかし、考えが変わった。四年生の時だ。

四年生の時、私は下水処理場へ見学に行った。社会科の学習の一部だったと思う。

「下水処理場は自分達が使った水をきれいにして海や川に流してくれるところ」無意識にそう思っていた私は、下水処理場のお姉さんの話をきいて、おどろいた。お姉さんは、「下水処理場は人間と動物が一緒に住めるようにするところ」と言うのだ。

下水処理場は、使った水を海や川にかえず。だから、海や川に住んでいる生き物たちと一緒に暮らせる水へもどす必要がある。その生き物と暮らせる水にするという役目こそが、下水処理場の仕事だとお姉さんは言った。はっとした。そういつた視点で水について考えたことがなかった私にとって、その話は私が水について考えるきっかけとなった。

大きな下水管を見せてもらったり、実際の下水のにおいがかがせてもらったりした。

人間の出した排水を魚が住める水の純度に戻すために必要な水量についても学んだ。例えば、しょうゆ大さじ一杯で四五〇リットルの水、おでんの汁五〇〇ミリリットルでは七四〇〇リットルの水が必要となる。これらを学んだ時から、「地球上の水は無限ではない」と思い始めた。

そこで、私も無限でない水を大切にするために、水の使い方を気をつけることにした。歯をみがく時は水をとめる。だが気づいた。歯みがき後のうがい時に水は出しっぱなしになっていた。歯みがきをする時は水をとめていても、その後は気をつけていなかった。結局、「節約する」といっても実行できていなかった。そんな姿勢だから地球は変わらないのだと思った。有言実行。一人ひとりが自分の言動に心がけ生活をする、地球は変わっていくのではないかと思う。

母が古くなった私の服を小さく裁っている。ご飯の食器汚れをふきとる布となる。汚れをとるといふ、日々の習慣となつていくことでも、水を節約することができるのだ。当たり前になつていく習慣。用途にあつた水量を見極めること。雨水をためて庭木にやること。ポタポタ滴が落ちる蛇口を父が修理していたこと。私が育つ中で、家族に教えられてきたことも多かつた。

一人ひとりが心がけることは大事だ。でも家族をはじめ、周りの友達や人々の考えを知ったり思いをわけあつたりすると、水を皆で大切にしていけるのではないか。共に暮らし、気づき、認めあえる社会がいいなと思つた。

自然災害の時にも、水はどこかに影きようをもたらす。車で道を走っている時に、道のおくに見える山が崩れているのを見た。豪雨による土砂崩れだ。地震が起きた時のニュースで、津波の映像が流れていた。迫力がすごく、改めて水の怖さを知つた。だが、土砂崩れを起こしている豪雨も、津波を起こしている海も、同じ水なのだ。いつも自分たちが生きるために必要としている、使っている、その水と同じ水だった。

水は、生き物と人間をつなぐ、一番近いものなのだ。下水処理場で働くたくさんの方の話をきいて、一番に学んだことだ。

私は下水処理場に行つて、当たり前前の生活の中のことを見直すきっかけになつた。社会では、自分の知らない所で、水について努力し、支えて守ってくれている人がいることを知つた。でもまだ私は、気づいていない事が多いだろう。アンテナを高くしつつ、今の自分にできる最大限の努力をしながら水を大切にしていきたい。そして小学生だった私が当たり前と感じた、この生活を支えてくださる人々の思いをもっと知っていききたい。そして、正しく水をおそれて敬いながら水と一緒に生きていこうと思う。

入選

共存する地球

兵庫県

兵庫教育大学附属中学校

三年

永田 愛織

私は、いや地球に住んでいる全ての動植物は、水の恩恵を受けながら生活し、命を受け、つないでいます。一方で、台風や集中豪雨などの異常気象により、水が私たちの命を脅かしていることも事実です。テレビを通して、河川近くの家や田畑、そしてそこに住む人々の安全や幸せが奪われている映像を何度も見ました。でも、これは、決して、テレビの向こう側だけの話ではありません。私の住んでいる加東市でも被害の大小はありますが、当たり前のようにおこつてしまつていくことなのです。

加東市には、市の名前の由来にもなっている一級河川の加古川が流れています。この川は、大雨などにより水位が上がると、川の近くに住んでいる方々に度々避難指示が出されます。市はそのため、防災計画として、家の立ち退きとともに河川の工事をおこなっています。私の家は川から少し離れているため、大雨が降っても大きな影響はなく、立ち退き対象にはなりません。登下校の時に河川の工事が進んでいるのを見ても特に気にとめていませんでした。

ある日、父から川の鯉が閉じ込められているという話を聞きました。河川工事の際、閉じ込められてしまったらしく、私は家族で見に行きました。河川工事は、川幅の拡張に伴い、工事車両の通り道を作るため大量の土砂を入れ、埋め立てを行っていました。しかし、土手近くは土砂が埋まっていないところがあり、そのせいで長い大きな水たまりが出来て、そこに鯉が五〜六匹閉じ込められていました。私は、父と鯉を見に行つてから、鯉のことが気になって、それから何度も見に行きました。水たまりは長く大きいとはいえず、川とは分断されており、水量が日に日に減っています。鯉は身体の一部を水面から出し泳ぎにくそうにしています。このままでは、鯉が死んでしまうと思った私は家族で鯉を捕獲し、主流の川へ逃がしました。

私はこのことがきっかけで、鯉を助けられた安堵感の一方、私達を水

の脅威から守ってくれる工事は、川に住む小さな生き物の犠牲の上に成り立っているんだという罪悪感を抱きました。私は、今まで自分達が安全に過ごすために、人間以外の生き物の住処や命を奪ってしまったのだと考えたことがあります。しかし、実際は身近で私も知らないうちに命を奪つてしまつているのだと思います。

私にはどちらが正解なのか分かりません。川の氾濫による危険から人々を守るのか。自然をそのままの姿で残し、生き物たちの命をつなぐのか。どちらも大切なことだと思うからです。人は一人では生きていきません。誰かに支えられて生活しています。そしてそれは自然も同じだと思います。海や山、そこに住む生き物や植物がなければ人は生きていきません。私は、放たれた鯉が大きな川で悠々と泳いでいる姿を見て、時には脅威にもなりながら、生き物たちの命を育んでくれる河川を人工的に崩す以外の方法を探っていきたいと思いました。そうすることが、水の恩恵を受けて命を紡いできた私達の使命だと思いました。そして、大雨や川の氾濫で命を落とした人々、その家族のためにできることではないでしょうか。

遠くない未来、誰もが川を見て脅威や悲しみを感じるのではなく、穏やかで安心した気持ちになれるような社会を築いていけることを願います。

入選

「生きている水」

奈良県 郡山西中学校 三年 藤森 美花

「見て！とっても綺麗！」

家族で車で移動中に、桜並木が続いている川の横を通った。川の水面には桜が映り、なんともいえない美しい景色が広がっていた。

「本当だね。懐かしいな。お母さんは、このすぐ近くの学校に通っていたのよ。あの頃は、川の中にたくさんのゴミが捨てられていて、冷蔵庫や自転車などが捨てられている時もあった、水は濁って汚かったけどな。」

「そうなの？桜のピンク色がわかるほど、水も綺麗だけど…。」

「そういえば、川を綺麗にしようとたくさんの人達が集まって、掃除をしたことがあったな。臭いがあったり、汚いゴミなどが出てきて嫌だったのを思い出したわ。」

話を聞いて、どんなに汚い川だったのか、今の様子からは想像できなかった。その時、水は、人によって汚されるけれど、人によって綺麗にもなるのだと思った。

私は、大和郡山市に住んでいる。近くでは、ホタルを見ることができ。ホタルは、豊かな自然と綺麗な水があるところでしか生きていくことができないのだから、見ることは本当嬉しい。水が綺麗だということなのだから。

お母さんが学生の頃、住んでいた近所の小川でホタルをよく見ていたそうだが、小川近くをコンクリートで埋め立て、家が建ち、それからは、ホタルの姿を見ることはなくなったとのことだった。植物がなくなり、水も汚れてしまったからだ。なんだか胸が痛くなった。

「水」は、私達人間だけでなく、植物や虫など生きている者にとって大切な物なのだ。水が汚れてしまうと人間や動物は、飲むことができない生きていくことができない。魚や虫なども、水の中で生きることができなくなってしまう。酸素を作り出し、種類によっては、私達の食物にな

る植物は、汚れた水では、体に毒のある植物が育ってしまう。食物連鎖の世界に生きている私達は、水を汚すことによって、自分達の手で、その輪を壊してしまうのである。考えると恐ろしくなった。また、私達によって、命を奪われたホタルのことを思うと悲しくなった。

しかし、再生した川のことを思い出すと希望を持つことができ、嬉しくなった。変わるのだ。

ゴミはゴミ箱へと当たり前のことができず、川への投げ入れで水を汚し、自然破壊へとつながる流れを断ち切り、工場排水や家庭から出る汚水や油など、しっかりと決められた方法で処理し、水を汚さないように一人一人が気を付けていくことが、大切な命の水を守ることにつながる。ていくのだと思う。

水は生きている。水を活かすために様々な努力が行われ、化学の進歩により、汚い水を浄化することができるようになっていく。水を綺麗にしようと思うのは、水が大切だとわかっているからだ。

大切に思う気持ちは、水にも伝わっているのではないだろうか。植物を愛情を込めて育てると綺麗な花が咲き、良い実をならすという話と同じなのではと思う。

お母さんの話から、汚かった川が美しく再生したのも、川を綺麗にしようとする度々掃除する熱い心が伝わり、美しく咲く桜を映し出せるほどに輝きたいと命の炎を燃やしたからではないだろうか。

ホタルが住み水も、美しい光を放つ姿を見ることを楽しみにし、綺麗な水を維持するよう努力している私達の気持ちに込め、同じように「ホタルを育てるために綺麗でいよう」と頑張っているように思った。

水も人も動物も植物もみんな生きていく。生きていくこと生かされていることに感謝し、もっと美しく住み良い環境を作れるように努力していきたい。

入選

祖父の野菜の秘密

奈良県

五條市立五條東中学校 二年

森田 舞依華

みなさんは毎日野菜を食べていますか。私の家では祖父の手作り野菜が毎日食卓に並びます。祖父の野菜はどれもみずみずしくて、とても美味しいです。私は祖父にどうやってたらそんなに美味しい野菜ができるのか聞いてみました。すると、

「そうだな、肥料の影響もあるとは思いますが、やっぱり大事なものは水だな。水は植物を成長させてくれるからな。」

と教えてくれました。理科の授業で、植物について学習したことはありましたが、美味しさの秘密を知りたくなくて、野菜の成長について調べてみました。

すると、野菜の成長には十七種類の養分が必要であることが分かりました。そのうち水素や酸素、炭素などは大気中から摂取します。ほかに、リン酸、カリ、カルシウムやマグネシウムといったものも必要です。これらは土に含まれています。足りなくなるものは祖父の言っていた「肥料」を土に混ぜることで補うのです。特にミネラル（酸素、炭素、水素、窒素以外の必須となる元素）が美味しい野菜に成長するかどうかのポイントとなるらしいです。そして、ミネラルを含む養分のほとんどは水に溶解、根を通して吸収されます。そして全体へと運ばれるのです。

では、野菜にあげる水はどのようなものかいいのでしょうか。まず、雨水です。雨水は大気中の窒素（植物の成長には欠かせない）を含んでいるため、基本的に良いとされています。

そして、その雨水が直接畑に降るのではなく、山からゆっくり時間をかけて流れてきたならばどうでしょうか。不純物をろ過しながら、なおかつ地中の養分を十分に含み、こんこんと流れてくる山の天然水は野菜作りにおいて適しているように思います。野菜や果物の有名な産地の多くは美しい山や川が近くにあることが多いです。

実際私の家の近くには山があり、森があり、吉野川が流れています。

祖父の畑も、山の天然水をふんだんに使っているので最高の野菜なのだと思います。祖父の野菜の美味しさの秘密はきれいな水にあったのかと私は思いました。

私は祖父の美味しい野菜をずっと食べたいと思います。それに、吉野川のきれいな水も大切にしたいです。しかし、近年川の汚染が問題となっています。吉野川においても下流にいくほど、きれいではなくなります。

水質汚染のおよそ半分は家庭から出る排水が原因です。たとえば、食べ残しの汁や食器を洗った台所の水、洗濯で使った水、トイレで流す水です。だからまずは、この生活排水を減らす努力をしなければいけません。

私の家で実践していることはてんぷら油の処理です。てんぷら油大さじ一杯が川に流れたとして、魚が住める水質にするにはなんとお風呂桶で約十六杯の水が必要になります。だから油を捨てる時には新聞紙に吸わせて燃えるゴミに捨てたり、再利用したりするようにしています。他にもちよつとした工夫で水質汚染は防げるに違いありません。

水は野菜を美味しく食べたい私たち人間だけでなく、地球に住むすべての生物に必要な不可欠なものです。だから水を必ず守らなければなりません。大切にしていきましょう。

入選

水への感謝

和歌山県 和歌山県立田辺中学校 二年 若勇 昌聖

「ああ、美味しい。」部活が終わった後、急いで水筒に入っている冷たい水を一気に飲む。

失われた体中の水分がリセットされて何とも言えない幸福感に満たされる。お茶や清涼飲料水ではなく、僕は三度のご飯を食べる時も必ず水を飲む。毎日沢山飲んでいのに、今まで深く水の事を考えずにいた。

当たり前前の存在すぎて有り難さも分からなかったのかもしれない。

しかし、昨年海外で活動されていたある日本人の「死」をニュースで知って水に対する僕の価値感が一変した。その日本人は、中村哲医師である。パキスタンやアフガニスタンで長年に渡って医師として現地の人々の健康や暮らしを守ってきた偉大な人物だ。

中村医師は、最初医療支援に尽力していたが、ある時「いくら治療しても根本的な解決にはならない、不衛生な水を飲む事をやめなければこの国の人々は病気で苦しみ続ける事になるだろう。」と悩み考え「百の診療所よりも一本の用水路」という信念のもと、井戸を掘り用水路建設に力を入れる事になった。

七年もの歳月をかけて二十五キロメートルにも及ぶマルワリード用水路が完成した。

清潔な水を手に入れる事ができるようになったアフガニスタンの人々は歓喜に沸き、子供達の感染症も減少していった。

僕は、中村医師のこの活動を通して水は生命の源であり、医療よりも勝る「自然の恵み」である事を改めて知る事ができた。

水があれば作物ができる。作物がとれば人は食べていける。そして栄養がとれば餓死する事はない。実際、中村医師も「医療は無力だ」と言っているように水は「自然の葉」なのかもしれない。

幸い僕達の住んでいる日本では、きれいな水がすぐ蛇口から出てくる。自分は、日本に生まれ、きれいな水をいつでも飲める環境にある事を「感

謝」しなければならぬと強く思った。この恵まれた環境そして自然を守るために、僕が今できる事は何だろう……。それをずっと心の中で問いかけた。すぐには答えは出なかった。今このテーマを考えている最中、僕達の住んでいる日本や世界はかつてない状況に直面し混乱している。目に見えない新しいウイルスに怯え、感染しないために学校にも行けなくなった。僕の心の中も不安と悲嘆で沈んでいた。

そんな時、ふと田舎の祖父父母の家の近くにあるきれいな川を思い出した。小学校の頃、夏になるとよく行って遊んだ。小さな滝からはキラキラと輝く透明で澄んだ水が流れ落ち、その下に溜まった水は、エメラルドグリーンのように深く濃く、底にある石も全て見えるぐらい透き通っていた。

僕は、頭の中でその光景を想像した。「ありがとう」と無意識にそう思った。さっきまで沈んでいた気持ちが少し和らいだ気がして、心が癒やされていた。

今は、不要不急の外出はできないけれど、この状況が落ち着いたら、あの川に行つて感謝を伝え、ゴミ拾いや掃除をしようと思った。

外出自粛の今の生活で出来る「節水」をして、水を大切にしていこうと思った。

中村医師のように何十万人もの命を救うことは僕には出来ないけれど、今できる節水や自然環境を守るためにどうすればよいか考えて意識しながら行動していきたい。

そして、水から受けた「恩恵」を忘れずに毎日「感謝」の気持ちを持ってこれからの人生「水」と向き合いながらこのすばらしい「自然の恵み」を大切に、未来へと繋いでいきたいと強く思う。

入選

水への感謝を忘れずに

徳島県 鳴門教育大学附属中学校 三年 松永 理沙

水は時として暴力を振るう。津波は言うまでもなく、一番の例である。いつもは穏やかな彼らも、感情を捨ててしまったかのような恐ろしい形で生命に被害を与える。しかし、水は人間が形成されていく前から、多くの生命と共に生きてきた。

現在もAIがどれほど発達したとしても私たちは水無しでは生きられない。そのため、日本では様々な方法で水の調達を図っている。降水量の少ない地方では、溜め池を造ったり、川の少ない地方では、降水量が多いことを活かし、屋根にタンクを設置して雨水を活用したりするなど、特有の方法も見られる。しかし、日本のように清浄水に変える技術を持っておらず、雨の少ない他国はどのような現状なのか。全く考えてもなかった私は、数週間前、テレビコマーシャルを見て驚愕した。

「その水は妹の命を奪った。生きるためには、飲むしかなかった。」私より小さい女の子が、目に暗い陰を落とし、川から汲んできた茶色く濁った水を飲むようにしていた。

そのコマーシャルは、カザフスタンを舞台としており、カザフスタンとはどのような所なのか調べてみた。ステップと砂漠から構成された国だそうで、清浄水に変える技術も普及できていない発展途上国でもあるそうだ。

たった二十秒のコマーシャル。その二十秒の中には、妹の命を奪われたという忘れることのできない話が盛り込まれている。二十秒の中には、もう一つの話があった。美しく透き通った水が蛇口から出て来て、大喜びしている子供達の姿だ。私は、「水は出て来て当然だ。」と考えていたが、その子供達を見ていると、いかに水が貴重であるか思い知らされた。

あまりにも衝撃を受けた私は、ネットで、広告作成を支持していた公益社団法人を詳しく調べてみた。すると、様々な動画がアップされていた。それは過去のコマーシャルを収録したもので、先程のコマーシャル

と同等に、心に深く残るものもあった。

「ランドセルを背負う代わりに、水を汲み、家まで運んでいます。」というナレーションを聞いた時には、私まで悲しくなってきた。

貧しいが故に、清浄水が飲めず、家族を亡くしてしまう。貧しいが故に、勉強道具を持つ代わりに、桶を持つ。生まれてくる場所が異なっただけで、大きな差異も生まれてしまう。持続可能な開発目標「SDGs」の中に、「安全な水とトイレを世界中に」と明記されている。水は、それほど重要なのだということが、身に沁みて理解できた。

水は時として暴力を振るい、生命に被害を与えてきた。しかし、水は常に生命を救つてもきた。ただ救いきれない状況もある。前述のような場合は、川や雨が少ないために、「技術」が必要となってくる。しかし私たち一般人には、技術継承など到底できない。

では、私に協力できることは何もないのだろうか。

直接的なことをすることは不可能に近いだろう。そこで、今回、水がどれほど貴重なものであるか考えたことから、蛇口をひねって、美しく透明な水が出て来ることに對する感謝を忘れないようにしたいと思った。感謝をする上で同時にしなければならぬことがある。やはり節水意識を鋭く保つことだ。水は、あるように見えて少ない。「有限の水を浪費せず使おう」というフレーズの中には厚い意味が込められている。持続可能な社会を十年先、百年先へと続けていくために、必要な時に、必要な量だけ使うというのは当然のこととして行動するべきだ。しかし、それは難儀ではないだろう。水への感謝を忘れなければ、自ずとできると私は信じている。

入選

水の大切さを知った出来事

香川県 高松市立牟礼中学校 一年 菜切 麻央

私が書道を習っている先生は去年、JICA青年海外協力隊で活動されている息子さんと一緒にケニアに行かれました。そこでは生活できる環境が整っておらず、日本では当たり前前のができなかったそうです。例えば、ケニアの女性は生活のための仕事をするのに水がなく、そのために仕事が止まり、生活をするためのお金をかせぐことができず、生きていくために本当に大変な思いをしているそうです。

私は先生からそんなケニアの女性を作ったぬいぐるみを買いました。それは、マト・マイニ（スワヒリ語で希望）といい、日本人の菊本さんという方が個人で設立した女性支援施設で作られたもので、とてもいいぬいに作られていて、かわいいぬいぐるみです。私は先生を通して一つ注文しましたが、水がなく、仕事が進まないの、ぬいぐるみの発送がおけると言われました。それを聞いて私は、生活をするために必要不可欠な水が、日本では当たり前のように使えることができているのにケニアではそれが当たり前ではないのだなあと思いました。

世界で水道水をそのまま飲める国は百九十六カ国中十五カ国しかないそうです。その中に日本はふくまれています。日本の中でも、香川県は雨が降らず、水不足が続くと取水制限があることもあります。私の母が若いころは、水不足で夜中は断水されたこともあり、その時じや口をひねると、茶色い水が出たこともあったそうです。水道水を安全に飲める日本でも水不足になり、水道水が飲めなくなることもあります。当たり前ではないのです。

水を大切にという言葉はよく聞きますが、実際に意識して節水している人は少ないと思います。豊かな日本に暮しながら、水の大切さを知ることが、なかなか難しいのかもしれない。世界を見渡すと、水が不足していたり、きれいな水がないことで命を落とす人もいます。生物や植物にとって欠かすことができない大切な命の源です。一人一人が節水

を心がけることは、とても大事なことだと思います。

私は書道の先生の話聞いたことで、ケニアの水事情について少し調べてみました。ケニアの農村部では、水不足が深刻で、水をくむことは女児、女性の仕事とされ、五キロ以上離れた場所まで歩いて水をくみに行かなくてはならず、多くの女性は仕事を中断しなくてはならなかったり、学校を休まなくてはならなかったりするそうです。そのせいで、私の注文したぬいぐるみを作る仕事が中断されたのだと知りました。

私にできることは何があるだろうと考えてみました。安全な水を守るために、生活排水をできるだけ汚さないようにし、風呂・洗たく・トイレ・洗面・料理などで意識して節水したいと思いました。

書道の先生からケニアの話聞いたことで、生活や命を危険な状態にしてしまうほどの水不足や水の汚染があるところを知り、水の大切さ、自分の国の環境の良さに気づくことができました。そして世界では当たり前ではない日本の水環境を知り、水のありがたさや大切にしないではいけないということを考える良いきっかけとなりました。

水は限りある資源であるということをお忘れずにこれまで以上に大切に使います。

入選

水と共に生きる道

愛媛県 松山市立鴨川中学校 一年 木下 大悟

「もう駄目かもしれないな・・・。」
テレビに映し出された映像を見て、ポツリと父がつぶやいた。初めて見る父の悲しげな背中に、胸がしめつけられた。降りしきる雨音は、僕の心にグサグサと突き刺さってきた。普段とは全く違う大雨。全然止みそうにない。外を見ると、すぐ側の川がもう少しで氾濫しそうだった。僕は、怖くて一睡も眠ることが出来なかった。

次の日のニュースで、
「氾濫を起しました！」

レポーターが叫んだ後ろに映る場所は、確かに見覚えのある場所だった。

二〇一八年七月、西日本豪雨により、父の会社の店が天井まで浸水し、全てを失った。昨日まで当たり前に過ごしていた日々は、もう二度と帰っては来ない。僕はこの時初めて水の怖さを知った。

片付けをする為、父は水が引いたお店に出かけて行った。夕方帰宅した父から、見せてもらった多くの写真に、僕は言葉を失った。浸水によって店の中の商品は散乱し、見る影も無くなっていった。泥と砂にまみれたフロアは、水の脅威を物語っていた。僕の知っているお店は、もうそこには無かった。水が全てを奪ってしまったのだ。柱に残された浸水がここまできたという水の線は、父の身長をはるかに越えていた。

今までの僕は、雨は恵みだと思っていたし、雨によって人々の生活は守られているときえ思っていた。雨が人々を脅かすものになるなんて、少しも考えたことは無かった。「水は限りある資源」という言葉をよく耳にする。以前テレビで、人が生存するのに必要な水は、二リットルあまりで、人として生活を送るのであれば、一日に最低二十から五十リットル必要であるという事を聞き、とても驚いた。蛇口をひねれば当たり前水が飲めて、使えると思っていたからだ。

この出来事をきっかけに、僕は幼かった頃の事を思い出した。ある日、

母と何気なく見ていたテレビに、目を奪われた。ペットボトルに入った泥水を、小さな女の子がゴクゴクと飲んでいたので。学校へ行くことも出来ず、飲み水を汲むために、朝早くから出掛ける。何十キロという重いタルを頭に乗せて、水を運ぶ。その時の僕は、「かわいそうだな。」という気持ちしかなかった。しかし、今考えてみると、キレイな水を飲めることが当たり前ではないと強く感じる。世界では、水を確保することが出来ず、年間四百八十万人、一日に換算すると五千人近くが亡くなっている。僕はこの事実を知った時、驚くとともに、とても悲しい気持ちになった。水は、人が生きていく為には絶対必要であり、大切である。しかし、それらは時として、水害を起し、人の命を奪ってしまう場合もあるのだ。だからこそ、水と向き合って生きていかななくてはならない。僕は改めて、水に対しての取り組み方を考えてみた。まず一つ目は、「水を大切に使う」こと。日常生活の中では、お風呂の残り湯は洗濯の時に再利用し、米の研ぎ汁は洗顔に使う。そうすることで、日々の節水に役立てることが出来るだろう。二つ目は、「水害に備えておく」こと。このことは、西日本豪雨で起きた父の出来事から学んだ。ハザードマップから最寄りの避難場所を確認したり、非常用品のストックをしておいたり、身近に出来る事はたくさんある。三つ目は、「世界に目を向ける」こと。世界には、日本のように簡単に水を手に入れることが難しい地域がある。そのような地域に井戸を掘って、水を手に入れようという取り組みが行われている。僕は、そのボランティアに参加したいと考えている。

人は、生きるために水を手にする。それは時として災害になる事もある。しかし、水とうまく共存していくことで、人々は幸せな生活を送ることが出来るのだ。僕はこれからも、水と共に生きていきたい。そう強く願う。

入選

ふるさとと海

佐賀県 唐津市立海青中学校 三年 松永 梨奈

私の生まれ育った呼子の町は、海が本当にきれいな場所です。きれいな海で育った新鮮でおいしい魚を求めて、全国から多くの観光客が訪れます。

遊覧船に乗れば、海上からの景色だけでなく海の中の様子まで見ることができます。しかし、地元で暮らしていると海岸や海で、ペットボトルやビニール袋など、明らかに人間が捨てたと思われるプラスチックごみがたくさん目につきます。私は小さい頃から海で遊んで育ってきたので、海岸にごみが流れついたりごみが海に捨てられていたりすると、とても悲しくなります。

海をごみ捨て場として使うのは、絶対におかしいと思います。私達が使った大量のプラスチックごみが海に流れてしまい、海洋プラスチックとして問題になっています。最近では、タイで絶滅危惧種のジュゴンの赤ちゃんがビニール袋を食べて死んでしまうということがありました。また、海に流れたプラスチックごみが波の力や紫外線の力で細かく砕け、マイクロプラスチックになり、それを小さな魚が食べ、クジラやイルカなどの大きな生き物の体の中に入ってしまうそうです。それで死んでしまったり、傷つけてしまっているそうです。また、マイクロプラスチックを食べた魚を人間が食べ続けることで有害な物質が体内に蓄積され、人体に影響が出るのではないかと問題視されています。

その事実を知り、何か私にできることはないかと考えました。私の町ではクリーンデーという町をきれいにするボランティア活動が行われています。私も毎年家族みんなで参加しています。家が海のすぐ近くなので、海岸を掃除することが多いのですが、お風呂の浴そうなどありえないものがたくさん捨ててあるのでびっくりします。ほかに中身の入ったビンやタバコ、プラスチックごみなど海の生き物に悪影響がありそうなものがたくさん捨ててあって、危ないと思います。

「捨てればごみ、分ければ資源」という言葉があるように、みんながごみと思っているものは、きちんと分別すれば資源となります。そのために私達一人ひとりがごみを減らす努力をし、周りに呼びかけることが重要だと思います。

今、日本の廃プラスチックのリサイクル率は二十七・八%と、リサイクルがあまり進んでいないことが分かります。もつと3R(リデュース、リユース、リサイクル)と進め、有効に賢く利用することで海洋プラスチックも減らすことができるはずですが、しかし、リサイクルをするにしてもコストや手間がかかるので、なかなか進まないのが現状です。私達一人ひとりが毎日の暮らしの中でプラスチックごみを減らすことを意識することで必ず、ごみが減っていくと私は考えています。自分の住んでいる町を自分達の手できれいにすることで、心もきれいになって社会も明るくなると思います。

私にとって海は、心のいやしです。海を見ると、自分の悩みも小さく見えてきて、不安もなくなりスッキリします。みんなもきれいな海を見ると、明るい気持ちになると思うので海はきれいにしたいです。観光客の人や久しぶりに呼子に帰ってきた人などに「やっぱり呼子の海はきれいだな」と思ってもらえるような海にしたいです。大好きなこの町のために、これからも海岸清掃を続け、ごみを減らす活動をしていきたいです。いつかこの呼子の町がごみ一つないとってもきれいな海になるまで。

入選

生命を守る水

長崎県 長崎市立淵中学校 二年 島田 美花

数ヶ月前、テレビのドキュメンタリー番組に目がとまりました。アフガニスタンで銃で撃たれ二〇一九年十二月四日に亡くなった中村哲さんの追悼番組でした。三十五年にわたり、アフガニスタンの人々のために医療支援、水路建設などに力をつくされた方だったそうです。私はそれまで、この中村哲さんという方を知りませんでした。人々の先頭に立ち、自らショベルカーなどを動かし、泥にまみれて、汗を流している様子が映されていました。お医者さんだと分かり、テレビを観ているにつくりしました。なぜ、そこまで中村さんがアフガニスタンの人々のために働くのか、知りたいと思いました。

当初、医療支援を目的に現地に行った中村さんは、長年にわたる争いとさらに大干ばつで、飢えと貧困に苦しむ人々に出会いました。そこで中村さんは気が付いたそうです。それは、何かというと、生命を守るためには、医療より、まず、清潔な「水」が必要だということでした。それからは、毎日、井戸を掘り、水路建設に力を入れ、アフガニスタンの人々の支援に取り組まれました。水路建設の勉強も一からされたそうです。私は、この行動に驚かされました。こんなにもアフガニスタンの人々のために行動できる人は、中村哲さんしかいないんじゃないかと思いました。しかもその土地は、砂漠化が進んでいるところでした。二〇〇三年はたしかに砂漠だったところが、二〇一二年には、緑の大地に蘇っていました。水路が広がり、荒れていた大地が緑豊かな農地として蘇ったことで、多くの人々が故郷に戻ってくることができました。

もう一つ心に残ったことは、この水路を建設するということに、最初は協力していなかった現地の人々も、中村さんの一生懸命な行動に共感し、多くの現地の仲間と一緒に取り組んでいたところでした。現地の人々は、中村さんのことを、とても信頼していたそうです。

私は、この番組を通して、いろいろなことを感じました。日本ではい

つも、じゃぐちをひねるとすぐに、キレイな水が流れでてきます。でも決してそれがあたり前のことではないのだということを知りました。本当にありがたく思い、感謝の気持ちでいっぱいになりました。日本に生まれてきた私たちがあたり前だと思っていることが、水だけに限らず、決してあたり前ではないと気が付きました。

近ごろ、よくテレビのコマーシャルで、キレイな水を飲めていないということがながれています。私はこれを見て、水がどんなに大切か思いしりました。キレイな水がないと、病気やけがはすぐに悪化してしまいます。こう思っていくうちに自分たちがどんなにキレイな水が身近にあるかということが、わかりました。

このように、世界では、日本のようにキレイな水や、それ以外のものが十分でない国が多いです。中村さんや他の支援団体が水路など、いろいろと支援していますが、まだ、十分ではありません。支援について中村さんはこうおっしゃっていました。

「支援というと困った人を助けてあげるといった感覚でとらえがちですが、教えられることのほうが多いと思います。」

「金や武力さえあれば身を守れるというのは迷信です。」

「現地の子どもたちは、はつらつとしています。日本はあまりに豊かになりすぎて大事なものを見失っているように思えてなりません。」

私は、自分でできる水を大切にすることとは何だろうということ、そして、支援について考えさせられました。

入選

水と環境

長崎県 長崎市立淵中学校 二年 摺木 涼子

私の母は佐賀の者で、よく佐賀にある実家、つまり、私の祖父母のもとへ帰省します。国道四四四号線から見える、萱瀬ダムは車道よりもずっと下の谷底を水が流れていて、とても神秘性を感じます。そんなダムの仕組みや役割とはいつたい、どんなものなのでしょうか。

ダムが作られている主な目的のひとつは、治水です。治水とは、大雨がふつたときなどに川の水があふれたりしないように、川などを工事したり、流れる水の量を調整したりすることです。治水のおかげで、洪水は防がれて私たちは安全に生活ができています。

ダムが作られている目的の二つ目は、利水です。利水とは、田畑に水を送り届けたり、私たちが生活するための水を用意したりすることです。このように、ダムがあるおかげで、雨がたくさん降った時に水をためたり、逆に雨が降らない日が続いた時に田畑に水を送ったりと、私たちの安心した生活にダムは欠かせないものだとということが分かります。

そして、もうひとつダムをつくる目的があります。それは、発電です。ダムでは、貯めた水や川を流れる水の力を使って、水車を回して発電する、水力発電を行っています。水力発電を発明したのは、一八四〇年イギリスのウィリアム・アームストロングと言われています。

水力発電には、メリットもあればデメリットもあります。メリットの一つ目は、温室効果ガスを発生しないということです。日本でいちばん多い発電方法は火力発電ですが、火力発電は燃料を燃やして発電するため、たくさんの二酸化炭素等の温室効果ガスを発生し、地球温暖化につながります。それに対して水力発電は燃料を燃やしたりする必要がないため、とても環境に良い発電方法だと思えます。水力発電のメリット二つ目は、発電・管理のコストが安いということです。原子力発電や火力発電では、たくさんの燃料が必要となります。それに対して水は自然にあるもので、何度も再利用することができます。また、設備の管理や維

持にかかるコストも、他の発電方法と比べると安価だそうです。

つづいて、水力発電のデメリットです。一つ目のデメリットは、降水量によつて発電量が変わるということです。二〇一一年、大分県は県が管理する北川ダムの水位が降雨不足で発電用の水が足りなくなつたため、北川発電所と下赤発電所で発電を一時停止したということです。二つ目のデメリットは、ダムは環境や生態系に影響を及ぼすということです。ダムの建設により、周辺の環境や河川の生態系に影響が出ると言われています。ダムが建設されてから川の濁りが消えなくなつたり、アユが激減したりと全国各地で、このような現象が起きているようです。

このように、水は飲む以外にも様々な所で役立っています。水力発電では残念ながら、デメリットもあり、まだまだ解決できていない課題もあります。しかし水力発電の発電効率は、約八〇パーセントと、自然エネルギーの中ではいちばん高い数値となっています。

私はこれまで水を飲んだり、水で手を洗つたりと、たくさん水にはお世話になってきましたが、ダムの仕組み・役割や水力発電などを知り、水がどれほど大きな存在であるかを感じ、とても感心しました。生態系の悪化や水の災害など、悩ませられることはあるけれど、上手く利用できるよになれば、水はもつとたくさんのことに使えるようになると思えました。

入選

あのサウンドをいつまでも

熊本県

熊本市立出水中学校

二年

森野

りん

「ザーザーザー」

「ピチャッピチャッ」

「チョロチョロチョロ」

小川から流れてくる美しい水のサウンド。私のお気に入りの音だ。しぶきを上げて流れる水を眺めながら、時々「あつ、魚だ。」とつぶやく。自然に囲まれて江津湖を散歩する。気分が晴れやかになる。私の大好きな時間の一コマだ。

私の住む熊本は、「水の国」と呼ばれ、きれいな水が豊富な街だ。水道水は日本でも有数の地下水でまかなわれている。県内各地には千箇所以上の湧水地があり、たくさんの名水地があるそうだ。調べてわかったことだが、その名水地に私の大好きな場所「水前寺江津湖公園」、通称「江津湖」も含まれているという。

江津湖を散歩していると、しみじみ感じることもある。それは、虫や鳥や魚、草や花や木々が生き生きとしていることだ。話すことができるわけではないが、語りかけるかのように堂々と存在するのだ。キラキラと輝いていて生きているのが見て、聞いて、触れてわかる。私までもが、生きているのを実感することができる。これが、生命力というものだろうか。

なぜ、生き物たちがあそこまで生き生きとしているのか。

それは、やはり江津湖の美しい水があるからだろう。人間は水がないと生きていけない。江津湖のあらゆる生き物も同じように、水と関わり合って生きている。水は生物にとってかせないものであり、生命の源となっているのだ。

だからこそ、水を大切にしなければならない。水は資源である。限りがある。私たちには、果てしない未来に美しい水を受け継ぎ守り抜く、そんな大事な役割がある。

「水は大切にしなければならぬ」と誰もが言う。しかし、行動に移す

人は少ない。私も口で言うだけの人の一人であった。

しかし、今はちがう。

熊本地震が起こった日。

「水が、出ない……」

その時の衝撃は今でも覚えている。蛇口をいくらひねっても、水は一滴も落ちてこない。水がないと、トイレもお風呂も食事も、何もすることができない。結局、私は家族でやかんやペットボトルに江津湖の堤防からチョロチョロとわき出る水をためて、家に持ち帰って使った。その時は「不便だな」と不満に思っていたが、後から考えてみれば、自分は水に頼りすぎたことを実感した。

だから、今は身近なことから「節水」をしている。歯みがきをするときはコップを使う。水道やシャワーは、こまめに水を止める。これらのことを毎日続け、水に頼りすぎる社会を、水に感謝する社会に変えていきたい。

「水に感謝する」というのは、水の存在に感謝するだけではない。水を管理し安全に私たちに届けてくれる人にも感謝、命を犠牲にして人間の食べ物になった生き物にも感謝。なぜなら、水を安全に飲むことができるのは管理してくれている人のおかげであり、命を犠牲にしてくれた生き物も、もとをたどれば水のおかげで生きていたことになるからだ。

すべての原点は水。水がないと私たちは生きていくことができない。この世界には、水をめぐって戦争が起こったり、水がないことで自分を犠牲にしたりする人が多勢いる。いつかそんな社会を、世界中の人が手を取り合い、美しい水で命をつなぐことができる社会になってほしいと願う。その日が来るまで、私たちは水を守り未来へ受け継ぐべく、自分のできることから行動していかなければならない。私は、江津湖の水から守っていき

たい。そんなことを考えながら、水のサウンドを聞きながら、今日も歩いている。

入選

みんなが笑顔で水を飲むために

大分県

大分大学教育学部付属中学校

二年

山本 希来

「安全な水が蛇口から飲めない」という体験をしたことのある日本人は一体どれくらいいるのだろうか。きっと大きな災害に遭ったり海外に旅行をしたりしたことのある人でなくては今一つ分からない感覚だろうと思う。私はこれまで祖母に連れられアジアの様々な国を訪れた。近場では中国の香港・マカオや台湾、少し遠いところだとシンガポールなどだ。しかしそれらのどの国でも水道を飲むことはできなかった。水道の水はあくまで生活用水であり、飲み水はペットボトルなど売られているものでしか得られない。現地のスタッフに水道水を飲むのは危険だ、と言われた時には、そのことに驚き、また寂しさのようなものを感じたのを覚えている。それほどまでに当時小学生で日本の安全で衛生的な環境しか知らなかった私にとって、水道から出る水が飲めない地域があるというのは衝撃的だった。

しかし、世界には水道水どころか安全な水さえ手に入らない地域がある。アフリカやエチオピアなどの多くの途上国では安全に飲める水が身近になく、子供や女性たちが炎天下の中、水を汲むために毎日何kmも歩いている。そうしてやっと手に入れた貴重な水さえも衛生的とは言えない。そういった過酷な生活や不衛生な環境に苦しみ、命を落とす子供たちが世界にはたくさんいる。

一方で私たちはそんなことには目を向けず、料理やお風呂、トイレなど必要以上の量の水を使っている。「飲めるほどに安全」である日本の水道水を飲むこと以外に贅沢に使っているのだ。私たちはこれがどれだけ恵まれたことなのかもっと理解する必要があるのではないだろうか。蛇口を捻るだけで綺麗な水が流れるのだから、彼らの重労働とは比べものにならない。

日本では室町時代に北条氏によって上水が建設されたのが最古の水道に関する記録だそう。その後一五八三年には豊臣秀吉によって大阪城

の城下町に下水道が建設されるなど諸大名によって上下水道が整備されていった。そして明治時代には東京で近代水道や浄水場などが整備された。昭和中期に入ると水道に関する法律が制定され、高度な水質基準とそれをクリアするだけの技術が開発された。このように今は世界最高水準だと言われる日本でも、今日のように飲み水を広く行き渡らせるには何百年もの月日を要している。しかし日本が今持っている技術があれば、綺麗な水が手に入らず苦しんでいる子供たちを早急に救うことができるような施設や画期的な薬が作れるのではないだろうか。

では、そのためには私たちに何ができるだろうか。今、日本で問題視されていることの一つとして水質汚染が挙げられる。水質汚染の原因を工場から流れ出る産業排水だと思えば、実は川や海に流される汚濁の七十%以上が生活排水によるものだとされている。私たちの生活を振り返ってみよう。洗面所やお風呂場で水を出しっぱなしにしているのだろうか。台所で必要以上に洗剤を使ったり、食べ残しや使い終わった油などをなんとなく流したりしていないだろうか。そんな一人ひとりの意識の低さが積み重なって、川や海の汚染に繋がっている。これを解決していくには一人ひとりが水質の大切さを学び、水を汚さない努力をする必要があるだろう。そうして私たちが水を汚さないことを心がけることで、綺麗な水が増え、飲める水が増えたり、汚水の処理に使われていた技術をもっと他の国や地域でも活かせるようになったりすれば、いつの日か、みんなが安心して水を飲む日がくるのではないかなと思う。



水について
考えよう

第42回
全日本
中学生

水の作文 コンクール

“水の惑星”と呼ばれる地球。
でもその水は、無限ではありません。
地球上をめぐる限られた水を、人々は身近な生活のほか、
農業や工業など多くの場面で便利に使っています。
その一方で、ときには洪水や水不足の被害に
見舞われることもあります。
あなたにとって、水とはどんなものですか？
暮らしのなかでの体験や、
授業で学んだことや調べたことをもとに、
水についての考えを作文にまとめてみましょう。

◆ メインテーマ

水について考える
(個別の題名は自由)

◆ 原稿(記載要領)

- ① 400字詰原稿用紙4枚以内、日本語で記入された個人作品
- ② 本文の前(原稿用紙枠内)に題名、学校名(ふりがな)、学年、氏名(ふりがな)を明記

【主催】水循環政策本部、国土交通省、都道府県

【後援】文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、環境省、水の週間実行委員会、独立行政法人水資源機構、全日本中学校長会

◆ 応募締め切り

【国内】各都道府県の水資源担当部局にお問い合わせください
【海外】令和2年5月20日(水)

◆ 提出先(問い合わせ先)

国土交通省水管理・国土保全局水資源部水資源政策課
〒100-8918東京都千代田区霞が関2丁目1番地3号
TEL:03-5253-8386(直通)

◆ 入賞発表

令和2年7月中旬頃

◆ 表彰(予定)

- 最優秀賞(内閣総理大臣賞) 1編
- 優秀賞(各大臣賞ほか) 9編
- 入賞 約30編
- 佳作 約100編

最優秀賞及び優秀賞の受賞者は東京での表彰式に招待し、賞状等を授与します。また、副賞としてダム事務所等の一日事務所長を体験することができます。

8月1日は「水の日」、8月1日～7日は「水の週間」です。

※詳しくは「水の日・水の週間」ホームページ
(<http://www.mizunohi.jp>)をご覧ください。

水の日 検索



第42回「全日本中学生水の作文コンクール」概要

- 1 応募要領
- ① テーマ・・・「水について考える」（題名は自由）
 - ② 対象・・・中学生（令和2年度に中学校に在学中の者、または、これらの者と同じ学齢の者を含む）
 - ③ 原稿枚数・・・400字詰原稿用紙4枚以内で日本語により表記された個人作品
 - ④ あて先・・・中学校等の所在する都道府県水資源担当部局、ただし、外国に居住する者にあつては、国土交通省水管理・国土保全局水資源部
 - ⑤ 応募期間・・・令和2年7月31日までに国土交通省水管理・国土保全局水資源部あて到着分有効
 - ⑥ 版權等・・・○応募作品は自作の未発表のものに限る
○応募作品の使用権は、主催者に帰属する
○応募作品の返却は行わない

- 2 審査
- 応募作品9,444編のうち、各都道府県の地方審査を経た180編について国土交通省水資源部による内部審査を行い、中央審査会の対象となる42編を選出。
令和2年8月31日に開催された中央審査会において、最優秀賞1編、優秀賞8編及び入選33編あわせて42編の入賞作文を決定。

- 3 表彰 (1) 賞および賞品

賞		賞品
最優秀賞	内閣総理大臣賞	賞状、副賞
優秀賞	厚生労働大臣賞	賞状、副賞
	農林水産大臣賞	
	経済産業大臣賞	
	国土交通大臣賞	
	環境大臣賞	
	全日本中学校長会会長賞	
	水の週間実行委員会会長賞	
独立行政法人水資源機構理事長賞		
中央審査会特別賞		
入選		賞状、副賞

- (2) 表彰式 今年新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、開催を取りやめることとしました。

4 中央審査委員（敬称略）

- 熊谷 和哉 内閣官房水循環政策本部事務局参事官：厚生労働省医薬・生活衛生局水道課長
 豊 輝久 内閣官房水循環政策本部事務局参事官：農林水産省農村振興局整備部水資源課長
 塩手 能景 内閣官房水循環政策本部事務局参事官：経済産業省経済産業政策局地域経済産業グループ地域産業基盤整備課長
 森田 健児 内閣官房水循環政策本部事務局参事官：国土交通省大臣官房参事官（水管理・国土保全局水資源部担当）
 筒井 誠二 内閣官房水循環政策本部事務局参事官：環境省水・大気環境局水環境課長
 宮田 正博 全日本中学校長会編修部長
 須磨 佳津江 キャスター
 長崎 宏子 スポーツコンサルタント
 玉野井 晃 公益社団法人日本水道協会調査部長
 三輪 準二 独立行政法人水資源機構理事

- 5 主催者等 主催：水循環政策本部、国土交通省、都道府県
 後援：文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、環境省、
 全日本中学校長会、水の週間実行委員会、独立行政法人水資源機構

第42回「全日本中学生水の作文コンクール」地方審査優秀者名簿

番号	都道府県名	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名
1	北海道	おおあさ あやの 大麻 綺乃				
2	青森県	くどう こはる 工藤 小陽	たかまつ まひろ 高松 舞博	とのきき あらた 外崎 新	ませり なこ 眞勢 里奈子	かわむら ゆうま 川村 佑真
3	岩手県	なかしま おゆみ 中島 歩	ちだ あんな 千田 杏南	うづか さよ代 宇塚 さよ代	ほそだ ももな 細田 萌々菜	むらまつ いちろう 村松 一郎
4	宮城県	にしほら ゆいか 西原 結花	おほがき らん 大柿 楽々	おほがき らん 伊藤 路		
5	秋田県	ながさき みづき 長崎 美月	やまだ ななみ 山田 七海			
6	山形県	さきはら あいり 笹原 愛里	おほめま 春か 大沼 春花	さとう まな 佐藤 まな	かどわき かんき 門脇 感樹	
7	福島県	いとうえ りわ 井上 りわ	おほつ さきほ 大津 咲歩	きら あやの 木村 彩乃	くさの りん 草野 凜	よした ひとき 吉田 仁輝
8	茨城県	ひア キネイサ ヒア キネイサ	ささき あすか 佐々木 あすか	もり 彩乃 森 彩乃	かなざわ かな 金澤 花帆	ふじしろ かね 藤代 かれん
9	栃木県	さいとう ゆい 齋藤 優	ひろせ ののか 廣瀬 のの佳	はやし 咲ゆり 林 咲結理	にしむら のぞみ 西村 希美	
10	群馬県	おたに ゆうと 大谷 優斗	いしか あい 石北 愛泉香	おさき あやか 尾崎 文郁	たくち いくこ 田口 郁子	ふくだ ゆうか 福田 優花
11	埼玉県	きたがみ 咲季 北神 咲季	おつ 美咲 乙供 美咲	たかし 彩水 高杉 彩水	みや村 かなみ 宮村 護	わたなべ まお 渡邊 舞桜
12	千葉県	くさば みう 草場 美海	すぎた りお 杉田 里央	よしの みさき 吉野 美咲	のうみ こうき 納見 幸希	
13	東京都	ささき しづな 佐藤 史絵菜	かたはら さわ 棚部 さわ	せとう りいち 増尾 諒一	こんどう りりか 近藤 利里香	かわち なつき 河内 那月
14	神奈川県	まるおか りゆうせい 丸岡 龍生	あまた 桂菜 天田 桂菜	せとう はるか 瀬戸 陽香	きんづか みゆう 君塚 心優	にしむら りお 西村 莉緒
15	新潟県	たかはし ほのか 高橋 穂花	はが しおり 羽賀 詩彩	さくま しほか 佐久間 朱花	たかの なつか 高野 夏花	わたなべ めい 渡辺 芽生
16	富山県	ゆい なほ 稲場 結奈	やまざわ まり 山澤 麻莉	よこやま 奈々 吉浦 奈々		
17	石川県	つちやま もも 土山 桃愛				
18	福井県	かわむら まほ 川村 真穂	うすぞみ 夕里 宇佐美 夕里	しまだ まり 嶋田 麻里	しまだ りりか 嶋田 梨里花	たけしま あい 竹島 葵
19	山梨県	やこ う えれさ 谷古宇 愛麗	かじはら つきほ 梶原 都希羽	のむら ねね 野村 音々	いわさき じゆり 岩崎 朱哩	かねこ のりゆき 金子 倫之
20	長野県					
21	岐阜県	たくち あみ 田口 亜美	たけはら みゆ 竹原 美優	ひろた ゆきほ 廣田 倅帆	よしかわ もか 吉川 萌果	せきや いつき 関谷 一貴
22	静岡県	こんどう さやか 近藤 沙彩	なかつやま ひろ 中津山 日彩	いけがや あきな 池ヶ谷 秋奈	みつなみ めい 光浪 芽生	やまぐち りま 山口 りま
23	愛知県	こうべ ここな 河邊 心那	おがわ ゆうな 小川 裕宇那	たかざわ ゆうり 高澤 優里	まの そうま 眞野 聡真	むらまつ おとは 村松 音波
24	三重県	さた しずく 作田 澪	たか ゆいな 館 優衣奈	ながい さやこ 長井 咲耶子	よねやま もも 米山 百音	しろいし いぶき 白石 伊甫貴
25	滋賀県	かつせ そうま 勝瀬 颯馬	すぎた たまき 杉田 多真希	のひら ゆり 野平 ゆり		
26	京都府	あいはら あい 柏原 葵	あや 綾 東山 綾	いのうえ ほのか 井上 歩乃花	あさい さつき 浅井 瑠月	
27	大阪府	ひきち かなほ 引地 奏葉	ほりえ ももな 堀江 桃菜	たかはし かん 高橋 花怜	めいお さん 命尾 沙耶	やすだ ゆな 安田 有那
28	兵庫県	ながた きづな 永田 愛織	こてら ゆうな 小寺 優菜	いながき みさ 稲垣 心彩	おがわ なおゆき 小川 尚之	みずた ひとみ 水田 瞳美
29	奈良県	もりた まい 森田 舞依華	ひらた ゆうたろう 飛田 優太郎	まえ たかお 前 貴夫	ふじもり みか 藤森 美花	そうま こう 相馬 光
30	和歌山県	わかやま 昌聖 若勇 昌聖	いしかわ 更紗 石川 更紗	いばた かな 井端 加奈		
31	鳥取県					
32	島根県	めつぎ ゆうと 目次 悠翔				
33	岡山県	ふじさわ りゆうすけ 藤澤 龍佑				
34	広島県	きもと よしひろ 木本 佳宏	のじま ゆい 野島 由衣	とうぐ さと 當具 里菜		
35	山口県	すみだ みづき 住田 瑞樹	ふくだ たつや 福田 達也	さかね たくみ 坂根 巧望		
36	徳島県	まつなが りさ 松永 理沙	やまね ゆい 山根 由衣	しのむら はると 篠村 陽人	ひらまつ まさき 平松 政樹	はらだ まき 原田 真希
37	香川県	なかり まお 菜切 麻央	おおいけ 眞由 大池 眞由	むらかみ 琴音 村上 琴音		
38	愛媛県	きのした だいご 木下 大悟	いしかわ ゆう 黒河 結	いのうえ あいり 井上 愛理	たけち ももか 武智 百香	にい さくら 新居 桜
39	高知県					
40	福岡県	うの まさひろ 宇野 誠洋	たなか るな 田中 瑠奈	じぶた みう 治部田 美羽	くぼ ゆうか 久保 優花	にしおか みお 西岡 美桜
41	佐賀県	まつなが りな 松永 梨奈	みくや 彩貴 御厨 彩貴	よしたけ ゆあ 吉武 優杏	まきあかり 眞崎 明里	
42	長崎県	しみだ みか 島田 美花	いしくろ ゆうま 石黒 悠真	さくき りょうこ 摺木 涼子	しげやま せな 茂山 聖菜	たにぐち あやね 谷口 采音
43	熊本県	もりの りん 森野 りん	にしかわ まい 西川 麻生	しみず はるか 清水 遥	さかた りな 坂田 莉奈	むらかみ ぼるか 村上 遥
44	大分県	やまがた たいま 山形 希来	やまむら たいま 山村 太恭	こうの まさ 河野 真緒		
45	宮崎県	おほしろ ぎや 大城 冴和	いのみむら 浩太郎 岩切 浩太郎	みなむら 遥佳 南村 遥佳	こだま ゆい 児玉 結	ながさか けいご 長坂 佳悟
46	鹿児島県	うえち りゆうき 上地 琉喜	かが ら けんた 加々良 健太	いって さき 井手迫 茂花	まてい あさひ 喜禎 あさひ	はやせ こ 早瀬 心葵
47	沖縄県	しんじょう 帆野佳 新城 帆野佳	よき ななせ 与儀 七星	いすず わこ 糸洲 わこ	なかつ 蒼登 仲松 蒼登	ごや ゆうと 呉屋 優斗
48	海外					

(注) 氏名の前の印は、中央審査会における入賞者で、☆は最優秀賞、◎は優秀賞、○は入選

第42回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況

都道府県名	地方審査 優秀者数 (編)	応募学校数	応募総数 (編)			
			1年	2年	3年	
北海道	1	8	145	10	109	26
青森県	5	4	63	16	25	22
岩手県	5	6	22	0	5	17
宮城県	3	6	15	1	1	13
秋田県	2	2	2	0	0	2
山形県	4	1	6	0	0	6
福島県	5	11	221	0	33	188
茨城県	5	8	429	134	173	122
栃木県	4	2	130	0	67	63
群馬県	5	12	789	119	453	217
埼玉県	5	10	153	98	48	7
千葉県	4	11	180	2	175	3
東京都	5	20	514	117	120	275
神奈川県	5	7	504	36	411	56
新潟県	5	6	46	1	40	5
富山県	3	5	285	2	138	145
石川県	1	1	1	0	1	0
福井県	5	1	61	0	30	31
山梨県	5	1	61	19	20	22
長野県	0	0	0	0	0	0
岐阜県	5	6	113	2	47	64
静岡県	5	9	463	300	93	70
愛知県	5	12	15	2	2	11
三重県	5	5	399	148	212	39
滋賀県	3	7	156	140	3	13
京都府	4	9	319	54	204	61
大阪府	5	8	313	278	12	23
兵庫県	5	1	98	0	0	98
奈良県	5	9	377	33	293	51
和歌山県	3	6	351	103	176	72
鳥取県	0	0	0	0	0	0
島根県	1	1	1	0	0	1
岡山県	1	1	1	0	0	1
広島県	3	7	65	1	64	0
山口県	3	2	15	3	4	8
徳島県	5	6	91	34	23	34
香川県	3	17	66	0	32	34
愛媛県	5	15	115	16	49	50
高知県	0	0	0	0	0	0
福岡県	5	6	446	1	274	171
佐賀県	4	20	481	0	280	201
長崎県	5	5	262	49	162	51
熊本県	5	21	1,086	411	434	241
大分県	3	2	177	0	16	161
宮崎県	5	5	257	97	81	79
鹿児島県	5	4	107	36	43	28
沖縄県	5	13	43	0	24	19
海外	0	0	0	0	0	0
合計	180	319	9,444	2,263	4,377	2,801

「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況の推移

		応募 学校数 (校)	応募 総数 (編)	性別		学年別		
				男	女	1年	2年	3年
				(編)	(編)	(編)	(編)	(編)
第1回	昭和54年	634	4,875	1,878	2,997	1,513	1,710	1,652
第2回	昭和55年	486	3,930	1,446	2,484	1,245	1,462	1,223
第3回	昭和56年	487	5,569	2,159	3,410	2,004	1,974	1,591
第4回	昭和57年	512	5,111	1,878	3,233	1,923	1,848	1,340
第5回	昭和58年	495	4,192	1,435	2,757	1,925	1,214	1,053
第6回	昭和59年	531	7,013	2,905	4,108	2,923	2,115	1,975
第7回	昭和60年	572	9,703	3,676	6,027	3,794	3,647	2,262
第8回	昭和61年	507	7,431	3,080	4,351	2,809	2,680	1,942
第9回	昭和62年	513	9,253	3,789	5,464	4,086	2,935	2,232
第10回	昭和63年	498	10,119	4,233	5,886	4,212	3,501	2,406
第11回	平成元年度	641	13,192	5,601	7,591	5,345	4,392	3,455
第12回	平成2年度	551	11,782	5,320	6,462	5,404	3,549	2,829
第13回	平成3年度	623	12,056	4,834	7,222	5,174	3,821	3,061
第14回	平成4年度	552	12,718	5,332	7,386	4,898	4,533	3,287
第15回	平成5年度	473	13,680	5,340	8,340	4,658	5,024	3,998
第16回	平成6年度	557	13,647	5,591	8,056	5,247	4,577	3,823
第17回	平成7年度	558	15,918	6,617	9,301	5,940	5,388	4,590
第18回	平成8年度	491	15,479	6,595	8,884	5,403	5,606	4,470
第19回	平成9年度	456	13,688	5,731	7,957	5,088	4,792	3,808
第20回	平成10年度	493	13,764	5,935	7,829	4,842	4,609	4,313
第21回	平成11年度	429	11,903	4,971	6,932	4,324	4,059	3,520
第22回	平成12年度	413	14,283	6,288	7,995	4,737	4,968	4,578
第23回	平成13年度	362	11,841	5,131	6,710	3,862	3,844	4,135
第24回	平成14年度	413	13,442	6,159	7,283	4,878	4,691	3,873
第25回	平成15年度	453	13,385	5,980	7,405	4,100	4,618	4,667
第26回	平成16年度	452	16,488			5,595	5,655	5,238
第27回	平成17年度	439	15,726			4,489	6,464	4,773
第28回	平成18年度	373	16,038			5,157	5,811	5,070
第29回	平成19年度	385	16,173			5,242	5,697	5,234
第30回	平成20年度	339	14,927			4,516	5,118	5,293
第31回	平成21年度	344	16,462			4,929	6,038	5,495
第32回	平成22年度	378	16,941			5,592	5,925	5,423
第33回	平成23年度	365	19,618			6,930	6,635	6,052
第34回	平成24年度	368	16,826			4,542	6,692	5,591
第35回	平成25年度	368	18,191			5,564	6,602	5,924
第36回	平成26年度	331	19,419			6,555	7,406	5,365
第37回	平成27年度	345	16,432			5,197	6,949	4,280
第38回	平成28年度	314	15,246			4,533	6,110	4,603
第39回	平成29年度	357	16,725			4,735	6,910	5,080
第40回	平成30年度	314	14,151			4,182	5,750	4,219
第41回	令和元年度	290	12,760			3,584	5,554	3,622
第42回	令和2年度	319	9,444			2,263	4,377	2,801
合計		18,781	539,541			183,939	195,250	160,146

- (注) ・第10回から海外在住中学生の作文募集を始める。
 ・第26回から作文応募時の性別表記を不要としている。
 (教育現場における男女共同参画社会づくりに向けた取り組みに配慮)
 ・学年未記入者は、第35回101名、第36回93名、第37回6名、第42回3名で、
 学年別集計から除いている。

第42回「全日本中学生水の作文コンクール」表彰式

例年、水の週間中央行事「水を考えるつどい」において、最優秀賞と優秀賞の受賞者の表彰式を行っていますが、今年は新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、各中学校主催で表彰式を行っていただくことにしました。

なお、全国からの応募作品9,444編の中から選ばれた最優秀賞の受賞者による作文の朗読を、「水を考えるつどい」の中で、紹介予定です。(YouTube(MLIT channel)で、令和2年11月7日(土)に配信予定。)



最優秀作文の朗読
京都府 綾部市立上林中学校1年 柏原 葵さん
(内閣総理大臣賞受賞者)



最優秀賞受賞者の所属する中学校主催で行われた表彰式の写真
(左から、柏原 葵さん、綾部市立上林中学校 塩尻校長)



国土交通省

Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism

国土交通省水管理・国土保全局水資源部

〒100-8918 東京都千代田区霞が関2-1-3

電話 (03) 5253-8111 (代表)

ホームページ

<http://www.mlit.go.jp/mizukokudo/mizsei/index.html>